

孟德斯鳩著
何禮之重譯

萬法精理

第十冊
自卷廿八下
至卷廿九

21007

福岡第一師範學校
(學校圖書)

登錄 書號	第	號
社會科學門 法律法學部		
總記	款	叢書項
目		次
全	18	冊ノ内第 16 冊
分類 書號	第	號
320.8		

福岡第一師範學校

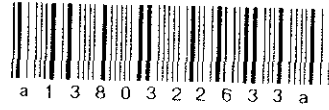
書	門
部	
番	
號	
冊ノ内	

T1A1

23

Ka11ba

圖書 和圖書 迦



福岡教育大学蔵書

孟德斯鳩著
何禮之重譯

萬法精理

明治九年
一月刻成

何氏藏版

萬法精理第十六冊目次

第二十八卷下

- 第廿八回 裁判怠弛ノ上告ヲ論ス
- 第廿九回 聖王路易ノ年代
- 第三十回 上告ニ就テノ考察
- 第三十一回 全上
- 第三十二回 全上
- 第三十三回 全上
- 第三十四回 裁判法ノ秘密ニ歸セシ原由
- 第三十五回 訴訟入費

第三十六回 檢事

第三十七回 聖王路易設定ノ法制廢絶セル緣由

第三十八回 全上

第三十九回 全上

第四十回 教主ノ布令ヲ借用シテ裁判章程ヲ

制定シタル緣由

第四十一回 政教二法ノ裁判權ノ消長

第四十二回 羅馬法ノ再興及ヒ其ノ成果○諸法

院ノ改革

第四十三回 全上

第四十四回 證據覈驗法

第四十五回 佛國ノ風俗慣習ヲ論ス

卷之二十九 法律編制論

第一回 制法者ノ精神ヲ論ス

第二回 全上

第三回 陽ニ制法者ノ趣意ニ背馳スルカ如キ法

律往々民心ニ應合スルヲアルヲ論ス

第四回 制法者ノ趣意ニ背馳スル法律ヲ論ス

第五回 全上

第六回 全樣ノ法律ニシテ成績相異ナルヲ論

ス

第七回 全上 法律ヲ規畫スルニハ其ノ當ヲ得

サル可ラサルヲ論ス

第八回 陽ニ同様ノ法律ニシテ之ヲ制定セル本

意常ニ齊シカラサル事

第九回 希臘羅馬二國ノ法律齊シク自殺ヲ罰シ

タレ氏其ノ本意自ラ同シカラサル事

第十回 異様ノ法律ニシテ其ノ精神ヲ同シクス

ル事

第十一回 法律ノ異同ヲ辨別スル方法如何

第十二回 全様ノ法律ニシテ往々其ノ實ノ相異

ナル事

第十三回 法律ト之ヲ制定セル目的トヲ分離ス

可ラス

羅馬ノ盜賊律

第十四回 法律ト之ヲ制定セル時勢事情トヲ分

離ス可ラサル事

第十五回 時トシテハ法律自ラ改正セサル可ラ

サル事

第十六回 法律編制ノ際ニ服膺スヘキ大綱

第十七回 法律頒定ノ拙策

第十八回 畫一法ノ意見

第十九回 制法者ヲ列論ス

萬法精理卷之二十八下

何禮之譯

第二十八回 裁判怠弛ノ上告ヲ論ス

裁判怠弛ノ上告ハ諸法院ニ於テ訴訟人ヲ審判スルヲ遷延シ或ハ之ヲ迴避シ或ハ之ヲ拒テ受理セサル時ニ起ルモノトス

佛國第二朝諸王ノ時ハ州牧ノ下ニ數員ノ屬官アリ其ノ進退ハ專ラ州牧ノ掌トル所ニ歸シタレヒ裁判權ハ之ヲ侵スヲ得ス右屬官ハ被告ノ日ニハ法庭ニ坐シテ終審ノ裁判ヲ言渡スヲ更ニ州牧ニ異ナラス唯々權

限ニ廣狹アリテ死刑ヲ宣告シ人ノ自主權ヲ判斷シ財產ヲ返償スルカ如キ大事ハ州牧ニ非サレハ審理スルヲ能ハサルノミ

更ニ一層進テ國家ノ政務ニ關係スル大事ニ至テハ國王ヲ除ク外ハ州牧ト雖モ裁判權ヲ施スヲ得サルヲ猶ホ屬官ノ州牧ニ於ルカ如シ即チ教長州牧及ヒ諸侯伯ノ間ニ起ル所ノ爭訟ニシテ國王大臣ト會審ノ上ニテ裁決スヘキモノ是レナリ

或ハ州牧ノ裁判ニ服セサルトキハ之ヲ王室ノ代官ニ上告スルノ順序ナリト云フ論者アレハ原ト州牧ト王

室ノ代官ノ裁判權ハ殆ト同等ニシテ彼此互ニ相關セス其ノ異ナル所ハ唯々代官ハ四月ニ一回審庭ニ坐シ州牧ハ八月ニ一回開院スルニ過キサレハ直ニ此ノ論ヲ信認シ難タシ

若シ一タヒ審庭ニ於テ有罪ニ決シタルモノ更ニ覆審ヲ請求シ然ル後尚ホ其ノ非分ト定マルキハ主任ノ法官ニ十五「ス」ノ罰鍰ヲ納ムルカ或ハ杖十五ノ實刑ヲ受ケサルヲ得ス

若シ州牧或ハ代官ノ權力以テ侯伯ヲ約束スルニ足ラサルキハ則チ保任ノ證ヲ立テ國王ノ法院ニ出頭セシ

メ該院ニ於テ更ニ其ノ原由ヲ審理スヘシメツズノ集
會法例中國王ノ法院ニ裁判不當ノ上告章程ヲ定メ都
テ自餘ノ上告ヲ禁止スル即チ是レナリ

若シ訴訟人州判ノ裁判ニ服セス而モ苦情ヲ鳴サハル
キハ之ヲ獄ニ繫テ其ノ服從スルヲ俟ツ若シ苦情アル
ハ之ヲ國王ノ法院ニ護送シテ覆審ス

然レハ當時ノ實況ニ於テハ絶テ裁判ノ怠弛ヲ上告ス
ルノ餘地アラサルカ如シ何トナレハ州牧其ノ他裁判
權ヲ有スル諸官吏ニ對シテ更ニ職務怠弛ノ苦情ヲ訴
フモノ無キ而已ナラス却テ其ノ民事ニ干渉シテ細察

煩苛ニ亘ルヲ愁苦スル世態ナルヲ以テ屢王室コリ
制令ヲ州牧其ノ他ノ法官ニ頒布シテ一歲三四以上ノ
審庭ヲ開クヲ禁止シ其ノ緩慢ヲ責メスレテ唯々繁
忙ヲ招クヲ抑制シタレハナリ

然ルニ侯伯ノ土地益分封シテ無數ノ小地主ヲ生シ大
小相聯ナリテ主從ノ制亦タ數等ニ分ル、ニ至テ間ニ
ハ裁判怠弛ノ苦情ヲ受クル地主ナキニアラス殊ニ國
王ノ如キハ數種ノ罰鍰ヲ仰キテ以テ收入ノ一大部ニ
充タシタレハ終ニ裁判怠弛ノ上告法ヲ設立スルニ至
レリ

格闘審法ノ慣習日ニ月ニ流行シテ漸ク旺盛ノ勢ヲ致
スニ及テ同輩ヲ集會スヘキ場所、事件、時日ヲ訂定スル
一容易ナラス隨テ裁判遷延ノ弊ナキ能ハサルヨリ裁
判怠弛ノ上告法ヲ設立シタリ而シテ當時ノ戰ハ殆ト
皆ナ政法違背ニ起ラサルハ無キヲ恰モ今日列國ノ間
萬國公法ニ遵從セサルヲ開戰ノ名義ト爲スニ異ナラ
ス此ノ上告法ヲ設立スルニ因テ屢國史中ニテ有事ノ年
紀ト爲レリ

ボーマノイル曰ク裁判ノ怠弛ヲ上告スルニ方テハ格
闘スルヲ許サス其ノ故ハ第一封臣ハ主公ノ身ヲ犯

ス可ラサルヲ以テ直ニ主公ニ對シテ格闘ヲ挑ミ能ハ
ス又其ノ案件ハ甚タ明白ニシテ審庭ノ召喚ニ應シ或
ハ其ノ他遷延ノ日數ノミヲ算計スヘキヲ以テ同輩ニ
對シテ格闘ヲ挑ミ能ハス又未タ裁判宣告ノ日ニ到ラ
サルヲ以テ其ノ不當ヲ上告スルニ由ナシ之ヲ要スル
ニ同輩ノ犯罪ハ其ノ主公ニ害ヲ貽ス一更ニ訴訟人ニ
於ルニ異ナラサレハ主公ト同輩ト相戰フハ規則ノ許
サハル所ナリ

然レ此上等法院ニ於テ裁判怠弛ノ憑據ヲ明示スルハ
乃テ證人ノ供述ニ據テ然ルカ故ニ證人ニ對シテ格闘

ヲ挑ミ得ヘク更ニ主公ノ同輩ヲ犯スニ當ラス

若レ一定ノ時日ヲ經過スル後尚ホ裁判ノ宣告ヲ怠リ
或ハ之ヲ規避スル等同ク主公ノ封臣若クハ同輩ノ過
失ニ係ルハ右同輩ニ對シテ裁判怠弛ノ事ヲ主公ノ
君長ニ上告シ而メ果シテ同輩ノ非理ニ決スレハ乃チ
罰鍰ヲ主公ニ納メシム主公ハ決シテ右ノ同輩ヲ援ケ
能ハサルノミナラス各人ヨリ六十リフルノ罰鍰ヲ
納ムル迄却テ其ノ租地ヲ押當スヘシ

第二、若シ夫レ法院ノ人數ニ缺員アリテ裁判ヲ宣告ス
ルニ足ラス或ハ封臣ヲ召集セス若クハ之ヲ召集スヘ

キ有司ヲ置カス其ノ怠地金ク主公ニ屬スルハ裁判
怠弛ノ旨ヲ主公ノ君長ニ上告スルヲ得ヘシ此ノ場合
ニ方テモ主從ノ名分アルカ為メニ訴訟人ノミヲ召喚
シテ主公ヲ召喚セス

若シ主公ノ君長ノ法院ノ審判ニ於テ主公ノ怠弛ニ非
サルニ裁決セラル、ハ右訴狀ヲ主公ノ法院ニ却
下シテ六十リフルノ罰鍰ヲ收納セシム然レモ若シ
其ノ怠弛ニ裁決セラル、ニ於テハ主公ノ裁判權ヲ剥
奪シテ更ニ上等法院ノ裁判ヲ仰カシム以上裁判ノ怠
弛ヲ愁訴スル趣意ナリ

第三組地ニ係ル所ノ爭訟ニ限リテ主公ヲ其ノ法院ニ

控訴スルルハ

其ノ前例トスニール公トフランドル伯ヲ其ノ大訟ヲ以テ

判急弛ノ旨ヲ國王ノ法院ニ上告シタリフランドル伯

ハフランドルノ封内ニ其同輩ヲ召集シテ之ヲ裁決ス

ヘント答辯シタレ國王ノ法院ハ之ヲ聽サス右訴一

狀ヲ却下セシテ該伯ヲ國王ノ法院ニ召喚シタリ一

定ノ時日ノ經過スルヲ俟テ國王ニ稟准シ其ノ名ヲ以

テ主公ヲ同輩ノ審庭ニ召喚スヘシ是レ國王ノ名ヲ假

ラサレハ同輩ニテ主公ヲ召シ能ハサルヲ以テナリ

時日ノ遷延ニ加フルニ主公カ宣告セル裁判ニ服セサ

ルヨリ裁判ノ急弛ト其ノ不當ヲ連帶シテ上告スル

往々鮮ナカラス

封臣ニシテ裁判急弛ヲ以テ主公ヲ上告シ而シテ若シ

其ノ實ヲ得サルハ主公ノ意ニ隨テ罰鍰ヲ徵收セシ

ム若シ上告者封臣屬士ニアラサルハ唯

タ六十リフールノ罰鍰ヲ納ムルノミ

嘗テガント府ノ住民裁判急弛ノ旨ヲ以テフランドル

伯ヲ國王ノ法院ニ上告セシアリ之ヲ審問スルニ該

伯ノ裁判ハ土地ノ慣習ニテ認許セル時日ニモ滿タス

更ニ急弛ノ實ナキヲ以テ之ヲ却下セラレハ該伯

ハ上告人ノ財産六萬リールニ値ルモノヲ押執レタ

リ於是上告人ハ罰鍰過重ヲ口實トシ再ヒ國王ノ法院

ニ愁訴シテ之カ減額ヲ願ヒタレ_レ罰鍰ノ輕重ハ原ト該伯ノ權限内ニ在ルヲ以テ之ヲ受理セサリキボ_レマノイルモ此ノ裁決ヲ宣告セ_レ一人ナリト云フ

第四、其ノ他封臣ノ身體、名譽或ハ(租地ニ属セサル)財産ニ該リテ主公ト封臣トノ間ニ起ル處ノ爭訟ニハ更ニ裁判怠弛ノ上告ヲ爲スヘキ權理ナシ何トナレハ此等ノ訟事ハ之ヲ主公ノ法院ニ控訴セス直ニ主公ノ君長ノ法院ニテ審判スルカ故ナリデ_レフオ_レン_レテ_レン_レ言ニ封臣ハ其ノ主公ノ身ニ裁判ヲ施スヘキ權ナシト是_レナリ

以上論述スル所ハ古人ノ著撰ヲ繙キテモ迷霧眼ヲ遮リテ容易ニ其ノ黑白ヲ判ツヘキニ非サレハ之ヲ説明シテ讀者ニ了然タラシムルニ於テ予カ功勞ナシトセ_レス抑モ事物ノ錯亂ヲ理メテ端緒ニ就クヲ得ルハ之ヲ新創スト謂フモ亦タ不可ナカルヘシ

第二十九回 聖王路易ノ年代

聖王路易カ其ノ直隸ノ諸法院ニ於テ格闘審法ヲ准行スルヲ廢止セ_レ所以ハ其ノ爲メニ頒定シタル制令ト當時ノ法典ニ依リテ見ルヘシ

然_レ_レ侯伯私領ノ諸法院ニ於テハ裁判ノ不當ヲ上告

スル場合ノ外ハ之ヲ准行スルヲ禁止セサリキ
封臣ハ其ノ初メ裁判宣告ノ法官ニ對シテ格闘ヲ挑ム
ニ非サルヨリハ裁判不當ヲ以テ主公ノ法院ヲ上告ス
ルヲ能ハサルノ例規ナリシカ聖王路易ノ時ニ至テ格
闘ヲ要セス直ニ上告スルヲ為レリ裁判法ノ一大變
革ト謂フヘシ
其ノ制令ニ曰ク主公ニ抗敵スルハ重辟ヲ犯スニ當ル
故ニ裁判不當ノ上告アルノ理ナシ既ニ主公ニ抗敵ス
ルヲ重辟ト認ムル以上ハ其ノ國王ニ對スルノ更ニ大
逆ノ罪タルハ言ヲ俟スシテ明カナリト其ノ上告ヲ禁

止スル斯ノ如ク夫レ嚴ナリト雖モ別ニ一線路ヲ開キ
テ以テ凡ソ主公ノ法院ノ裁判ニ服セサルモノハ其ノ
不當不公ヲ上告スルヲ無ク特リ訴訟人ノ受ケ得タル
損害ヲ辭柄トシテ之カ修正ヲ上等法院ニ向テ請求ス
ルヲ得セシムル而已ナラス越苦ヲ訴フ訟事ニ該リテ
ハ侯伯私領ノ諸法院ニ對シテ裁判不當ノ上告ヲ必行
スヘキ例規ト定メタリ
既ニ論セシカ如ク法典ノ章程ニ據レハ裁判不當ヲ以
テ直隸ノ諸法院ヲ上告スルヲ得ス唯タ其ノ脩正ヲ
請求スルニ止マレモ若シ家宰ニテ右脩正ノ願意ヲ肯

セサルキハ直ニ之ヲ國王ノ法院ニ上告スルヲ得タ
リ

聖王路易ハ裁判不當ヲ以テ主公ノ法院ヲ上告スル
ヲ准許シ其ノ案件ヲ國王(或ハ主公ノ君長)ノ法院ニ移
シテ覆審シ更ニ格闘ヲ要セス依法ノ訴訟式ニ從ヒ都
テ依證斷罪ノ裁判ヲ施行セリ

故ニ私領ノ諸法院ニ於ルカ如ク訴訟人其ノ裁判ノ不
當ヲ上告シ得ルモ或ハ直隸ノ諸法院ニ於ルカ如ク之
ヲ上告シ能ハサルニ拘ラス爾來全ク格闘ノ危險ヲ冒
サ、ルヲト制定セリ

デフオンテンノ著書ニ曾テ格闘審法ヲ用キスシテ上
告ノ順序ヲ履行シタル二例ヲ記セリ其ノ一ハ國王直
隸ノ聖クキンテンノ法院ニテ審問シタル訟事其ノ一
ハポンテキユ伯ノ法院ニテ執行セシ者ニシテ該伯ハ
審庭ニ臨テ古ノ裁判法ニ據ルヲ十分抗抵シタレ
終ニ克タス二件共ニ法律ニ依リテ裁判セリ

或ハ問フモノアラハ何故ニ聖王路易ハ私領法院ニ向
テ直隸法院ノ訴訟章程ニ相異ナル制令ヲ頒布セシヤ
ト答テ曰ク其ノ理素ヨリ知り易シ曾テ聖王路易カ直
隸法院ノ爲メニ制定セル規則章程ハ其ノ規模敢テ大

自ラ甘シテ裁判ノ不當ヲ上告スルノ危険ヲ冒スニ非サルヨリハ決シテ法院ニ控訴シタル案件ヲ移易セサルト制定シテ舊慣ノ上告法ヲ保存シ以テ格闘審法ヲ廢止セリ仔細ニ之ヲ言ヘハ該王ハ其ノ決行セル改革ヲシテ務メテ人民ノ視聽ヲ駭カサ、ランカ為メニ其ノ實ヲ去リテ其ノ名ヲ存セリ

右規則ハ未タ私領諸法院ノ為メニ一定ノ章程タルニ

至ラスボーマノイルノ説ニ據レハ當時聽訟法ニ二様アリ其ノ一ハ王制ノ章程ニ率由シ其ノ一ハ舊慣ヲ循守ス之ヲ取捨スルノ權ハ全ク主公ノ隨意ニアレヒ一タヒ其ノ一法ヲ決行スル上ハ爾後此ヲ去リテ彼ニ就クヲ許サス又云ククレルモント伯ハ新定ノ規則ニ從ヒ其ノ封臣ハ舊慣ヲ守リ主從其ノ趣ヲ殊ニシタレ氏主人ハ何時ニ拘ラス舊慣ニ復スルノ權ヲ有セリ否ラサレハ主人ノ權却テ封臣ニモ及サルヲ以テナリ佛國當時ノ景況ヲ觀ルニ直隸私領ノ二部ニ分レタリ聖王路易ノ法典ニ於テハ其ノ王制ニ遵フ州郡ト之ニ

遵ハサル州郡ト二様ニ區別セリ而シテ其ノ直隸州郡
ノ為メニ功令ヲ制定スルニハ國王ノ獨裁ヲ以テ決行
スヘシト雖モ之ヲ私領ニ頒布シテ遵行セシムルニハ
必ス有土ノ諸侯伯ニ協議シテ其ノ署名簽印ヲ得サル
可ラス此ノ順序ヲ履行セサルハ諸侯伯ハ各其ノ領
地ノ利害ニ應シテ之ヲ受否シテ妨ケナシ陪臣ノ主公
ニ於ルモ亦タ然リ聖王路易制定ノ法典ノ如キハ諸侯
伯ノ為メニハ關係甚タ大切ナル章程ヲ掲クト雖モ固
ト其ノ承諾ヲ要シテ頒布セシモノニ非サレハ之ヲ遵
行スルモノハ特リ己カ領地ノ利益ナリト信用スル輩

ニ限レリ故ニ聖王ノ子ロベルトハ之ヲ其ノ領地クレ
ルモントニ施行シタレバ封臣ハ之ヲ遵行スルヲ肯
セサリキ

第三十回 上告ニ就テノ考察

予カ考察ニ據レハ上告法ハ即チ格闘ヲ挑ムニ外ナラ
サレハ直チニ裁判宣告ノ時ニ於テ舉行セシナルヘシ
ボーマノイル曰ク若シ訴訟人格闘ヲ挑マズレテ一タ
ヒ審庭ヲ退クハ忽チ上告ノ權ヲ失フテ初審ノ裁判
ニ服從セサルヲ得スト格闘審法改革ノ後ニ至テモ猶
ホ依然トシテ此ノ規則ヲ存セリ

第三十一回 全上

奴隸ハ裁判ノ不當ヲ以テ主公ノ法院ヲ上告ス可ラサルハデフオンテンノ論說及ヒ法典ノ明文ニ歷然トシテ明カナリ故ニデフオンテンノ言ニ主公ト奴隸トノ爭訟ヲ決スルハ特リ天帝アルノミニテ更ニ人間ノ法官無シト

奴隸カ裁判ノ不當ヲ以テ主公ノ法院ヲ上告スヘキ特權ヲ剥奪セラレシハ職トシテ格闘審法ノ慣行ニ由ル故ニ特許狀或ハ慣習ニ依リテ格闘權ヲ有スル奴隸ハ假令自主民ヲ同輩トシテ審問ヲ受ルト雖モ亦タ裁判

不當ノ故ヲ以テ主公ノ法院ヲ上告スル特准ヲ有セリ是レデフオンテンカ士人ヲシテ裁判不當ノ上告ヲ受テ奴隸ト格闘スルノ耻辱ヲ受ケサラシメンカ為メニ種々ノ策略ヲ建白セル所以ナリ

格闘審法ノ慣行漸ク衰兆ヲ現シ上告ノ新法ヲ施行スルニ及テ自主民ハ主公法院ノ枉屈ヲ伸暢スヘキ特准ヲ所有スルニ特リ奴隸ニ限リテ然ラサルハ執法平允ノ大理ニ戾ルトノ議論起リテ遂ニ大審院ニ於テハ人品ノ貴賤ニ拘ラス一般ニ上告ヲ受理スルト為レリ

第三十二回 全上

主公ノ法院ニ對シテ裁判不當ノ上告ヲ為スルニハ主公ハ躬ヲ其ノ君長ノ法院ニ出頭シテ其ノ不當ニ非サル旨ヲ辯解スヘシ裁判怠弛ノ上告ニ於テモ亦然リ主公ハ審問ノ上果シテ怠弛ノ證據相立サルニ於テハ右裁判權ヲ回復センカ爲メニ上告人ト俱ニ其ノ君長ノ法院ノ召喚ニ應スヘシ

時勢ノ進步ニ從テ各種ノ上告法施行以來前ニ記セル二件ノ特別法ノ如キモ遂ニ普通ノ章程ト爲リタレハ當時ノ輿論主公タル者ノ義務トシテ領外ノ法院ニ奔走シ他人ノ私事ニ鞅掌シテ光陰ヲ徒費スルヲ以テ甚

タ失體ノ事ト看做シタルカ故ニワロア公非立ハ家宰ノ外ハ法院ニ召喚ス可ラスト布達シ而シテ上告ノ慣例受ニ頻繁ナルニ及テハ上告ノ答辯ハ悉ク訴訟人ノ義務ニ屬シテ法官ハ之ニ預ラサルト爲レリ

裁判怠弛ノ上告ヲ受ルキハ主公ハ唯タ其ノ裁判權ヲ失フニ止マルトハ既ニ論述スルカ如シト雖モ若レ當時ノ慣行ニ依リテ主公ヲ原被中ノ一人トシテ上告スルキハ國王若クハ其ノ君長ニ六十リフルノ罰鍰ヲ納メサル可ラス爾來上告ヲ受理セル後法官ノ裁判ヲ改擬スルカ爲メニ主公ヨリ罰鍰ヲ徵收スルノ慣例一

般ニ行ハレ更ニルースリンノ制令ニ依リテ一層ノ作用ヲ増シタリ然レ其ノ事原ト道理ニ背馳スルヲ以テ終ニ自ラ廢絶セリ

第三十三回 全上

格闘審法ヲ實行スルニ方テ裁判ノ不當ヲ以テ法官ヲ上告スル人ハ或ハ格闘ノ為メニ失敗ヲ招クハアルヘキモ絶テ勝利ヲ獲ルヲ保チ難レ夫レ一タヒ裁判上ニ於テ勝利ニ決スルモノハ他人ノ行爲ニ依リテ之ヲ左右ス可ラサルノ理アルカ故ニ若レ上告人格闘ノ上ニテ勝ヲ得ル時ハ更ニ異見ヲ懷ク人ニ向テ再闘セ

サル可ラス此ノ時ニ至リテハ既ニ格闘ニ因テ原トノ裁判ヲ平翻スルヲ以テ其ノ相闘ヲ趣意ハ裁判ノ善惡ヲ知ルカ為メニ非スレテ其ノ要求ノ正否ヲ決センカ爲メナリ是レ乃チ我カ法院ノ宣示法ノ由テ來ル所ニシテ其ノ法院ハ上告ヲ破毀レ或ハ裁判ノ宣告及ヒ之ニ對シタル上告ヲ併セテ破毀スト宣示スルハ若レ上告人ノ失敗ニ決スレハ直ニ上告狀ヲ抹殺シ若レ其ノ勝利ニ歸スレハ原トノ裁判ト上告トヲ併セテ抹殺シ新タニ訴訟ノ順序ヲ踐行セシムルノ謂ナリ然レ其糾問法ヲ以テ審按セル案件ニハ此ノ宣示法ヲ

カルヲ無レ即チローチ、フラフキンノ説ニ「紀問局ハ其
ノ創立ノ初末」此ノ章程ニ率由シ能ハストアル是レ
ナリ

第三十四回 裁判法ノ秘密ニ歸セシ理由

格闘審法ノ施行ヨリ訴訟ノ章程全ク公然ノ事ニ属シ
テ攻撃防護俱ニ齊シク衆人ノ目撃スル所ト為レリホ
ーマノイルカ證人ハ須ラク法庭ニ於テ證左ヲ明示ス
ヘルト言ヘル是レナリ

ブーチリエノ註疏ニ云ク往古ノ訟師及ヒ古法書ノ所
記ニ據レハ其ノ初メ刑事ヲ公衆ノ目前ニテ審問セシ

「恰モ羅馬人ノ公判章程ニ類似セリ是レ當時ノ風概
ノ執筆寫字ノ術ヲ識ラサルノ致ス所ニシテ一タヒ文
字ノ用法開クレハ人無量ノ意見ヲ立テ之ヲ方寸ノ中
ニ藏ムヘケレ」苟クモ之ヲ用キサルハ人ノ視聽ニ
觸ルヘキ章程ヲ立ル外更ニ人ノ意見ヲ定ムルニ足ル
モノ無シ

然リ而シテ受封ノ臣ノ審問スル所前後矛盾シテ妥當
ナラサルノ患アルニ依リ乃チ舊案前例ヲ存録シテ法
庭ヲ開ク毎ニ其ノ記憶ヲ喚起シテ裁判ヲ下スヲ得
タリ是レ證人ニ格闘ヲ挑ムヲ准許セサル所以ニシ

テ否ラサレハ則チ爭端百出實ニ際限アル可ラサルヲ
以テナリ

時世ノ推移ト俱ニ訴訟ノ章程一變シ從來公然ト施行
セシ所ノ訊問、通知、覆審證人ノ對質、檢事ノ意見等都テ
之ヲ秘シテ公衆ニ明示セス是レ全ク政體ノ沿革ニ因
由スルモノニシテ其ノ舊章程ノ往古ノ治圖ニ相應ス
ルハ猶ホ新法ニ非サレハ以テ新法ヲ行ヒ難キカ如シ
アーチリエノ註疏ニハ此ノ變革ヲ一千五百三十九年
ニ頒定セル制令ニ由ルト為セ予ハ謂ラク蓋シ自然
ノ沿革ニ出ルモノニシテ敢テ一時ノ法制ニ由ルニ非

ス當初一二ノ主公アリテ舊制ノ裁判法ヲ承ケテ適用
セサルヨリ甲乙傳遞シテ一般ノ風習ヲ成シ終ニ聖王
路易ノ改正法典ニ率由スルニ至レルナリ且ツポーマ
ノイルノ言ニ格闘准行ノ場合ニ非サルヨリハ證人ヲ
シテ公然ト證左ヲ陳述セシメス自餘ノ場合ニ於テハ
之ヲ密聽シテ文書ニ筆記ストアルニ據リテ之ヲ觀レ
ハ裁判法ヲ秘密ニスルハ格闘廢止ノ時ニ始マルヲ知
ルヘキナリ

第三十五回 訴訟入費

佛國ノ古制ニ於テハ俗務法院ノ裁判ニテ非曲ト定マ

ルト雖モ絶テ訴訟費ヲ徴取セラレシモノ無レ凡ソ訟
事ニ失敗スル人ハ巨額ノ罰鍰ヲ主公并ニ同輩ニ納メ
サル可ラス殊ニ格闘審法ノ章程ニテハ敗者ノ性命資
産ヲモ藉没セラルル故ニ別ニ訟庭ノ費用ヲ追徴セス
其ノ他ノ場合ニ於テハ預シメ罰鍰ノ額數ヲ定メ若ク
ハ主公カ隨意ニ賦課スル所ニ從ハサルヲ得サルヲ以
テ人民ヲシテ健訟ノ利害ヲ承知セシムルニ充分ナリ
而シテ訟事ニ就テ利得ヲ占ムルノ第一ハ主公ナル
論ヲ俟スト雖モ訴訟人ノ同輩ヲ召集シ或ハ之ヲシテ
裁判ヲ處行セシムルカ為メニ亦タ許多ノ費用ナキ能

ハス殊ニ舊慣ニ據レハ大抵爭訟ヲ片言ノ下ニ判決レ
後世ノ如ク案牘累多ナラサルヲ以テ原被俱ニ費用ニ
苦ムヲ甚タ稀ナリ

訴訟費ハ全ク上告法ノ准行ニ發端セシト見エタリ
デフォンテン曰ク成文律即チ聖王路易ノ新章程ニ循
テ上告スル片ハ費用ヲ辨償セサルヲ得スト雖モ舊慣
法即チ裁判不當ノ證左ヲ舉テ上告スル片ニハ之ヲ要
セス唯タ其ノ訟事ヲ主公ノ法院ニ却下スルニ及テ罰
鍰ヲ追徴シ其ノ所爭ノ物件ヲ押領セラル、ノミ
然ルニ新法ノ甚タ簡易ナルヨリ控訴頻繁トナリ一訟

事ヲ甲院ヨリ乙衙ニ上告シ之ニ關係スルモノハ家郷ニ安居スルヲ得ス加之章程ノ新創以來訴訟ノ件數著シク増加シ世態ノ開進ニ從テ人民ノ奸智モ亦タ相長シテ詭計ヲ設テ法網ヲ免脱シ愚直ノ人ハ往々奸黠ノ魚肉ト為ルヲ免レス案牘堆ヲ成セ凡兩造ノ曲直ヲ判スルニ易ラハ國中ノ訟師群ヲ成セ凡法律精通ノ人ハ十中ニ一ヲ得難ク無賴ノ徒ハ法禁アルニ拘ラス不良ナル訟師ノ助力ニ仗リテ良民ヲ妨害シ惡弊多端雜然紛出スルカ故ニ特ニ訴訟費ヲ制定シテ裁判宣告ノ用度ニ供シ以テ法網ヲ遁ル、惡風ヲ抑制セリ之ヲ制

定セシハ誰レソ和王甲列是レナリ

第三十六回 檢事

撒利里布利其ノ他諸蕃ノ法律ハ都テ罰鍰ヲ以テ罪惡ヲ懲治セルカ故ニ方今我カ國制ニ於ルカ如ク罪犯ヲ糾彈スル官吏ヲ置カス實ニ當時ノ訟獄ハ必竟損害賠償ノ一事ニ歸結セサルハ无キヲ以テ一切ノ刑獄殆ト民事ノ體裁ヲ成シ何人ニ拘ラス之ヲ告發彈問スルヲ得ヘシ之ニ反シテ羅馬法ニ於テハ罪犯ノ糾彈ハ人民ノ公有ニ屬スルヲ以テ其ノ政體ニ於テ右ノ官吏ヲ置ク所ナシ

格闘審法ノ慣行モ亦タ以テ此ノ官吏ヲ置キ難キノ一理由ナリトス何トナレハ自ラ好テ衆人ノ對手ト為リ各人ニ代リテ格闘ヲ試ミルハ痴呆ニ非サルヨリハ決シテ為サハル所ナレハナリ

ムラトリリーカ倫巴多ノ法律中ニ編入セル章程集成ノ中ニ我カ第二朝ノ諸王ノ時ニ公衆ニ代リテ糾彈スル官吏ヲ設置シタルヲ記載セリ然レモ此ノ書ノ全部ヲ通覽スル片ハ當時ノ所謂糾彈官ト方今我カ職制中ノ檢事代訴官長國王ノ訟師貴族ノ訟師ト全ク殊別ナルヲ省破スヘシ當時ノ所謂糾彈官ハ稍政務家事ノ處

分上ニ於テ公衆ノ代理人ニシテ專ラ民事ニ干涉スルヲナレ又右章程集成中ニモ其ノ罪犯ヲ糾彈シ或ハ未成丁ノ人寺院及ヒ人ノ分限ニ該リテ起ル所ノ訟事ヲ擔當シタルヲ見ス

公衆代訴官ノ設置ハ決シテ格闘審法ノ慣行ト兩立セサルヲハ既ニ予カ論述スルカ如シト雖モ右章程中ニ格闘權ヲ所有セル代訴官ノヲ記載スルヲ見出セリムラトリリーハ其ノ設置ヲ顯利王第一世ノ憲法創定ノ時ヲ距ル未タ久シカラスト斷定セリ而シテ該憲法ニ若シ人アリ其ノ父母兄弟若クハ其他ノ親戚ヲ殺ス片

ハ該死者ノ遺業ハ他ノ親戚ノ紹續スル所ト爲リテ本
犯之ヲ嗣キ能ハサル而已ナラス自己ノ基業ヲモ政府
ノ度支ニ没入セラルヘシトノ一款アルニ據テ之ヲ考
フルニ其ノ公衆ノ代訴官カ格闘ノ特權ヲ所有スルハ
蓋シ本犯ノ紹續權ヲ辯護シテ一旦度支ニ没入セル基
業ヲ討求スル訴訟ヲ起スノ時ニ限リテ普通ノ例規ト
爲リシナルヘシ

右章程中ニ復タ公衆代訴官ノ職分ヲ以テ盜賊ヲ捕ヘ
テ州牧ニ交付セサル人ヲ訴告スルアリ、徒黨ヲ聚メ騷
亂ヲ起シテ州牧ニ背反スルモノヲ告訴スルアリ、或ハ

州牧ヨリ死刑ニ所セラレタル犯人ヲ助クルモノヲ彈
劾シ或ハ州牧ヨリ盜賊ヲ交付スヘキ命令ヲ得テ之ヲ
遵奉セサル寺院ノ法律士ヲ彈劾シ或ハ國王ノ機密ヲ
外人ニ漏泄シ或ハ欽命ノ辦事官ニ強暴ヲ加ヘ或ハ皇
帝ノ詔敕ヲ侮慢シ皇帝親シ之ヲ統治シ或ハ其ノ
詔師ニ命シテ之ヲ統治セシム或ハ
國君ノ貨幣ヲ收受スルヲ肯セサル者等ヲ彈劾スル
ト爲セリ之ヲ要スルニ此ノ代訴官ハ法律上ニテ度支
院ノ處辨ニ屬スヘキ一切ノ事件ニ干涉セサルナレ
然レモ公衆ノ代訴官トシテ絶テ刑事ニ干涉セシモノ
ヲ見ス格闘審法ノ慣行故火其他審庭ニテ法官ヲ殺害

スル重件ヨリ人ノ分限、自主權、奴隸ニ至ルマテ全ク之ヲ職務ノ限外ニ措クカ如シ

右章程ハ特リ倫巴多ノ法律トシテ之ヲ制定セシノミナラス更ニ之ヲ集會ノ法例トシテ附加シタルカ故ニ其ノ職制ハ皆ナ我カ第二朝諸王ノ實踐スル所タルハ更ニ疑ヲ容ル可ラサル所ナリ

公衆代訴官ノ職制ハ我カ第二朝ノ滅亡スルキニ各州ニ派出セル國王ノ辦事官ト俱ニ廢絶ニ就キシヤ明カナリ何トナレハ當時州中已ニ審庭ヲ開テ訴訟ヲ聽クヘキ州牧アラサルヲ以テ其ノ威權ヲ輔クヘキ主任ノ

官吏アラサルヤ問ハスレテ知ル可ケレハナリ

我カ第三朝ノ時ニ格闘ノ審法盛ニ行ハレタレハ當時ノ法制ニテ公衆代訴官ヲ設置スヘカラス故ニブーチ

リエノソム、ルーラル書名ニモ裁判官吏ヲ論スルニ唯タ

家宰、訴人ノ同輩、執法吏ヲ記スノミテ更ニ一言ノ代訴官ニ及フヲナシ當時ノ告訴糾彈法ヲ知ラント欲セハ須ラク聖王路易ノ法典及ヒボーマノイルノ著述ヲ讀ムヘシ

マジヨルカ王ゼーマス第二世ノ法制ニ國王ノ摠訟師ヲ設置スルヲ掲ケタリ其ノ職制ハ全ク今日ノ摠訟

師ニ異ナラス我カ佛國ニ於テハ訴訟法改革ノ前ニ此ノ官吏ヲ置クコトナシ

第三十七回 聖王路易設定ノ法制廢絶セル緣

由

此ノ法制ノ命脉ハ甚タ長カラス速ニ創定ノ功ヲ竣リ一時ニ進歩シテ一時ニ衰微セリ此ノ法制ノ事ニ就テ少シク論辨スル所アラントス茲ニ聖王路易ノ名ヲ冠スル所ノ法制ハ其ノ序文ニ全國ノ法律タルコトヲ明言スト雖モ實際ニ於テハ決シテ然ラス之ヲ編輯セル趣旨ハ民事ノ訴訟、遺囑、資産ノ處分

法、嫁資、女子ノ利分、封田ノ收益、特典、及ヒ警察事務等ニ係ル諸件ヲ裁決スヘキ大則ヲ立定スルニ外ナラス何トナレハ大ニシテハ都府、小ニシテハ邑村、各自其ノ舊慣故習ニ因循スルノ當時ニ在テ新タニ普通ノ法律ヲ制定スルハ即チ一擊ノ下ニ現行ノ民例土俗ヲ破壊スルノ治術タルコトハ理ノ最モ賅易キ所ニシテ今日ノ如キ天下一般ニ君命維レ從フノ明世ニ於ルト雖モ一朝ニ各地ノ慣習ヲ廢止シテ劃一ノ法制ニ統合スルハ輕進躁歩ノ譏ヲ招クヲ免レス且又改革ニ先チテ審カニ利害ヲ計較シ若シソノ利害平均シ敢テ輕重ナケレハ

乃チ舊慣ニ仍ルニ若カサルヲ以テ治術ノ要ト認ムル
ルハ則チ更ニ小利ヲ慕フテ大害ヲ招クヘキ改革ヲ決
行スルノ理ナシ殊ニ當時佛國ノ形勢ヲ熟察スルニ諸
侯伯皆ナ君權ヲ擁シテ驕蹇自立ノ勢ヲ有スルヲ以テ
舊慣土俗ヲ改革シテ劃一ノ法令ヲ遵奉セシムルカ如
キ非常ノ事業ハ敢テ當時執政者ノ得テ企圖セサル所
タルヲ知ルヘキナリ

前文ノ所論ニ由リテ復タ此ノ法制ハデユカンダ氏カ
援引セルアメン府廳ノ寫本ニ記スカ如ク全國ノ侯伯
守令ヲ議法院ニ會同シテ制定スルモノニ非サルヲ

明示スルニ足レリ又他ノ寫本ニ據レハ此ノ法制ハ千
二百七十年聖王路易カ突尼斯ニ進發スル前に制定ス
ト記載スレモ聖王ノ進發ハ千二百六十九年ニアレハ
時日符合セスデユカンダノ論ニハ其ノ不在中ノ頒布
ニ係ルト謂フト雖モ全ク年月相違スルヨリ生スル所
ノ臆測ニシテ一モ信據スルニ足ルモノ無シ抑モ此ノ
事ハ經國ノ一大業ニシテ特リ法制ノ改革ニ止ラス或
ハ國亂釀成ノ禍機タルモ料リ難ケレハ聖王カ故ラニ
不在ノ時ヲ擇テ之ヲ決行スト斷定スルハ決シテ確説
ト爲スヘカラス且斯ノ如キ事業ハ國君ノ親裁ニ出テ

其ノ英斷ニ依ラサレハ決レテ成功ヲ期シ難ク況マ其
ノ時ノ留後攝政タルモノハ凡庸ノ侯伯ニシテ絶テ非
常ノ事ヲ爲シ得ヘキ人物ニアラス復タ一人トシテ改
革ノ利益ニ浴スヘキモノアラサルニ於テヤ現ニ留
後攝政ノ一人タルポンテユー伯ノ如キハ公然ト其ノ
領内ニ新定ノ裁判法ヲ施行スルヲ抗拒セシニ非ス
ヤ
第三ニハ或ハ今日傳フ所ノ法制ハ聖王路易ノ制定セ
シモノト全ク別物ナルモ亦タ知ル可ラス何トナレハ
右法制中ニ聖王路易ノ制令ヲ引證スルヲ見レハ乃チ

法制ノ註解ニシテ本文ニ非サルヤ明カナリ加之屢聖
王ノ法制ヲ引用スルボーマノイルト雖モ其言フ所ハ
常ニ特別ノ法律ニ止マリテ絶テ法制ノ大體ニ及フ
無シ且聖王同時ノ著撰ニ係ルデフオンテンノ書中ニ
裁判法ノ施行ヲ記スルニ二回ニ及ヘ凡皆ナ之ヲ過去ノ
事蹟ト爲セリ果シテ然ラハ其ノ實際ノ作用ヲ有シテ
而モ不學ノ人カ謬妄ノ序文ヲ冠シタル新法ノ編輯ハ
迥カニ聖王路易ノ法制制定ノ後ニ在リテ聖王ノ晚年
ハ論ヲ俟タス或ハ其ノ死後ニ至ルマテ未タ頒布セサ
ルモノナルヘシ

第三十八回 全上

然ラハ則テ現ニ聖王路易ノ稱號ヲ冒ス所ノ法制ハ果
シテ何者ナルヤ此ノ難澁雜駁ニシテ常ニ佛羅二國ノ
法律ヲ混淆シ法律學士ノ手筆ヲ以テ制法者ノ口氣ヲ
摸倣シ一切民法ニ關係スル諸問題ヲ剖析シテ餘蘊ナ
キヲ見ル法制ハ果シテ何物ナルヤ之ヲ會得シテ了然
タラント欲スルニハ須ラク吾人身其ノ時ニ處リ親ラ
其ノ事ニ遇フノ思想ヲ為サント要ス

當時ノ裁判法其ノ弊ニ勝ハサルヨリ聖王路易ハ人民
ヲシテ之ヲ厭惡スルノ意ヲ起サシメント欲シテ故ラ

ニ直隸私領ノ法院ノ為メニ數多ノ規則ヲ頒定セリ果
シテ其ノ成果ハ該王ノ預圖スル所ニ背カス該王ヲ距
ル未タ父シカラスシテ著述セルボーマノイルノ書ニ
人心翕然トシテ新制ノ規則ニ歸向シ私領法院ノ過半
ハ其ノ訴訟章程ヲ遵行スルニ至レリト記セリ

故ニ該王カ私領法院ノ為メニ此ノ規則ヲ制定セル始
計ハ更ニ全國ノ成法ヲ作ルニアラス唯タ模型ヲ鑄造
シ用捨ヲ各人ノ隨意ニ放任シテ自ラ便利ノ所在ヲ省
出サレムルニ過キサレ能ク充分ニ其ノ目的ヲ達ス
ルヲ得タリ之ヲ約言スレハ即チ良法ヲ示シテ惡弊ヲ

除キ去レリ故ニ直隸法院ハ論ヲ俟タス其ノ私領ニ属
スルモノト雖モ裁判法ヲ運用スル所ニ於テハ益事理
公道ニ適應シ道義宗教ニ和合シ以テ公衆ノ安寧ヲ維
持シ性命財産ヲ保護スルノ效用著明ニシテ人民ノ耳
目ニ歷然タルカ故ニ遂ニ一般ニ新制ヲ採用シテ舊慣
故習ハ自ラ擯斥セラレタリ

壓制束縛ノ手段ヲ避テ民心ヲ誘化シ權威ニ伏ル可ヲ
サルキニ人情ヲ怡悦セシムル方便ニ依ルハ乃チ治者
ノ才幹ヲ展スル機會ナリ抑モ條理ナルモノハ固ト自
然ノ勢力ヲ有スレバ時トシテハ暴虐ノ外貌ヲ粧フテ

始終之ニ抗敵スルモノアルヲ免レス然レバ此ノ抗敵
者ニ撞着スル所乃チ全勝ヲ奏スル吉兆ナレハ一戰ノ
後ハ敵者ヲ降服セシムルニ至ルヘシ

人民ニ佛朗克人ノ裁判法ヲ厭惡セシメンカ為メニ聖
王路易ハ特ニ羅馬法律書ノ翻譯ヲ命シテ之ヲ當時ノ
法律師ニ了悉セシメタリ佛國ニテ法律書著述ノ嚆矢
タルデフオンテンノ書中ニモ往々右譯書ヲ援引スル
以上ハ之ヲ佛國舊立ノ裁判法ニ聖王路易ノ法制ト羅
馬律トヲ合纂セルノ成果ト稱シテ可ナリボーマノイ
ルハ羅馬律ヲ採ルヲ甚タ多カラサレバ佛國ノ舊法ト

聖王路易ノ法制トヲ調和シテ並ニ用キタリ
故ニ予カ考察ニ據レハ聖王ノ法制ノ名ヲ冒ス所ノ律
書ハ前文ニ書ノ記者就中デフオンテント同一ノ趣意
ニ依リテ二三家宰ノ編輯ニ成リシモノナルヘシ該書
ノ標題ニ巴黎オルリンス及ヒ私領法院ノ慣習ニ基
テ編輯セル旨ヲ記シ其ノ序文ニ王國一統ノ慣行法乃
至安日及ヒ私領法院ノ例規ヲ論述スト記スルニ就テ
之ヲ見レハボーマノイル、デフオンテンガクレルセン
ト、フエルマンドア二州ノ為メニ法例ヲ編纂シタルカ
如ク此ノ書ハ專ラ巴里安日オルリンス諸府ノ為メニ

纂輯シタルヲ明白ナリ且又ボーマノイルノ言ニ聖王
路易制定ノ法律ニシテ既ニ私領法院ノ遵行スル所ニ
係ルモノ甚ク多キニ居ルトアル以上ハ之ヲ編輯スル
モノヲシテ其ノ律典ハ亦タ私領ノ法院ニ關涉ストノ
言ヲ標題ニ掲ケレハハニ至ルモ敢テ僭妄ナリト答ム
ヘカラフ標題緒言俱ニ渺漠トシテ一定ノ規模ナレ初
ヲ記シ次ニ王國ノ政務法院及ヒ府邑法院ノ慣行法ヲ
記シ末ニ全國一統及ヒ安日、私領法院ノ慣行法ヲ記セ
リ
各地方ノ慣習及ヒ聖王路易ノ法律ヲ彙纂セル人ト此
ノ書ノ編輯者ハ一人ニシテ決シテ二手ニ出テサルヲ

甚タ知リ易シ而レテ此ノ書ハ安日ノ舊慣ト當時ニ實
行シタル聖王ノ法制ヲ記シ約言スレハ佛國ノ古法舊
律ヲ究ムルニ必用ナレハ極メテ珍重スヘキ遺物ナリ
此ノ律書デフオンテン、ボーマノイル二家ノ著作ト相
異ナル所ハ制法者ノ口氣ヲ帶テ命令ノ詞ヲ用ウルニ
在リ而モ慣習ト法律トヲ筆記シテ法典ト為スヲ以テ
此ノ體裁ヲ用ウルモ敢テ妨ケナシ
此ノ法典ニ掩フ可ラサル瑕疵ハ佛羅ノ二律混淆シテ
明詳ナラス加フルニ絶テ關係ナキ二事ヲ合併シテ一
事ト爲シ往々前後ノ矛盾ヲ致スニ在リ

予ハ固ヨリ佛國ノ封臣或ハ同輩ノ法院ニ於テ越訴上
告ノ權ヲキ裁判ヲ宣告シ且予ハ之ヲ罰ス予ハ之ヲ免
スノ語ヲ用オテ律文ヲ擬定スル等頗ル羅馬人ノ公衆
裁判ノ遺風ヲ存スルヲ知ラサルニ非サレハ佛人ハ大
概舊制ノ裁判法ヲ遵行スルヲ甚ク稀ニシテ多クハ其
ノ後皇帝ヤ佛國ノ律學ヲ改整擴張セシト欲シテ頒定
セル新章程ヲ採用セリ

第三十九回 全上

聖王路易制定ノ裁判章程モ久シカラステ其ノ作用
ヲ失シ遂ニ具文ト爲レリ蓋シ王ノ本意ハ素ト至善ノ

聽訟法ヲ設立シテ舊慣ヲ一掃スルニ非ス專ラ人民ニ
舊慣ヲ嫌忌スル情ヲ發生セシムルニ在リテ新法制定
ノ一ハ第二義ニ屬スルヲ以テ一タヒ新法ニ弊害ヲ生
スレハ忽チ滅絶ニ就クヲ免レス

故ニ聖王路易ノ法制ハ佛國ノ裁判法ヲ改革スヘキ階
梯ニレテ乃チ新法院ニ進ム所ノ針路ヲ指示スルニ止
マリテ未ダ全ク實施ノ功ヲ竣フニ至ラス然レル人民
一タヒ上等法院ニ控告スルノ容易ナルヲ知リテヨリ
從來只タ一私領ノ慣例ニ止マル所ノ裁判法モ自ラ世
間一般ノ通則ニ率由セサルヲ得サルニ至リ此ノ機會

ニ際シテ聖王制定ノ法制ヲ頒布シタルニ依リテ始メ
テ裁判法ノ通則一定シテ法制ノ缺典ヲ補足セリ恰モ
建築ノ工落成シテ外架ヲ撤シ去ルカ如シ

抑モ非常ノ改革ニ着手スルハ終身ノ事業ニシテ速ニ
其ノ局ヲ結ヒ難タシ情勢既ニ熟スレハ顛覆ノ亂從テ
生スルヲ免レス然ルニ此ノ法制ノ頒定ハ殆ト經綸ノ
大技倆ヲ具ヘタル君相ニモ望ム可ラサル偉勲ヲ建テ
タリ

國中一切訴訟ヲ受理シテ終審ノ裁判ヲ為スハ獨リ巴
力門ニ限リテ然リ以前ハ唯々政務上ノ見點ヨリシテ

侯伯僧侶或ハ君臣主從ノ爭訟ヲ裁決スルニ止マリテ
曾テ民事ニ干涉セザリシカモ終ニ恒立ノ一大法院々
ル時勢ニ及テ一年數回ノ開審ハ未タ以テ一切ノ訟事
ヲ處斷スルニ足ラス乃チ放告ノ回数ヲ増加スルト
為レリ

巴力門恒立ノ法院ト為ルヤ否ヤ直チニ諸布告ノ纂輯
ニ著手シタリ今日オリムノ記録ト名クルモノハ即チ
良王非立ノ治世ニジヨンデ、モンルクノ纂輯スル所ナ
リ

第四十回 教主ノ布令ヲ借用シテ裁判章程ヲ

制定シタル緣由

或ハ駁撃ヲ試ムル論者アラシク何故ニ聖王ノ法典廢絶
ノ後ニ羅馬ノ裁判法ヲ措キテ教會律ヲ採用セシヤト
之ニ答テ云ク人民ノ耳目常ニ教會法院ノ章程ニ慣熟
スレバ羅馬ノ裁判法ニ至テハ更ニ之ヲ施行スル所ア
ルヲ見ス加之當時政教二法ノ裁判權ノ分界ヲ確知ス
ルモノ極メテ寥々タルヲ以テ同一ノ訟事ヲ或ハ教會
ノ法院ニ訴ヘ或ハ政府ノ法院ニ控告シ各法院ニ於テ
モ齊シク之ヲ受理シテ彼此ノ分界ヲ定メス當時ノ情
狀政府ノ裁判權ニ專ラ封田ニ係ル訴訟ト及ヒ全ク教

法ニ關係ナキ罪犯ノ裁判ニ限ルカ如シ若シ契約上ノ
爭論ニ就テ政府ノ法院ニ控訴スヘキ場合ニ至ルト雖
モ兩造協議ノ上ニテ之ヲ教會ノ法院ニ赴告スルヲ得
ヘク而シテ教會ノ法院ハ政府ノ法院ヲシテ其ノ宣告
セル斷案ヲ舉行セシムヘキ權利ヲ有セサルガ故ニ特
ニ宗門禁絶ノ方便ニ依リテ人民ノ服從ヲ要メタリ如
是人情世態ノ際ニ訴訟章程ヲ改革セント欲シタルヲ
以テ直ニ耳目ニ慣熟スル教會法院ノ規則ヲ採取シ
而シテ實施ノ作用ヲ有セサル羅馬法ニ依ラサリシナ
リ

第四十一回 政教二法ノ裁判權ノ消長

政權一タヒ散シテ侯伯ノ分掌ニ歸シテ統一ナル所ナ
キヨリ教會ノ裁判權ハ其ノ罅隙ニ乘シテ日ニ月ニ區
域ヲ擴充セリ然レニ教會法院ニテ侯伯ノ裁判權ヲ侵
蝕スル所ハ轉タ又王室ノ裁判權ニ擢取サレ漸ク教會
法權ノ衰兆ヲ現セリ而シテ教會法院ノ良制便法ハ殆
ト皆ナバ力門ニ採用サレテ遺ス所ナキヲ以テ教會法
院ニ存スル所ハ其ノ糟粕タル弊害ノミ加フルニ王室
ノ裁判權ハ其ノ基礎ノ確立スルニ隨テ能ク教會ノ弊
害ヲ矯正スルニ足レリ當時教會ノ弊害ハ實ニ忍ブ可

ラサル極度ニ達シタル一枚擧ニ違アラス下文ニ其ノ
直接ニ人民ノ利害ニ關係スル所ノ二事ヲ記スヲ以テ
讀者ハボーマノイル、ブーチリエノ諸書及ヒ列朝ノ制
令ヲ一閱シテ詳細ヲ知ルヘシ抑モ此ノ弊害ハ之ヲ矯
正シタル制令ニ據リテ今日知リ得ル所ニシテ原ト不
文無識ノ世ニ社會ノ間ニ流行シ開進ノ曙光ニ遇フテ
消滅セリ僧侶タルモノカ之ニ就テ一言スルヲ見サル
ハ蓋シ共ニ此ノ改革ヲ催促スルニ與リテ盡力セシ故
ニシテ其ノ良心ノ不昧ナル實ニ感スヘシ其ノ弊害ト
ハ凡ソ何人ヲ論セス寺院ニ財産ノ一部ヲ遺贈セスシ

テ死スルキハ無懺悔ノ死ト稱シテ晚餐ノ聖禮ヲ饗シ
可ラス且基督教ノ禮式ヲ以テ葬殮スルヲ得ス若シ遺
囑ヲ立テスシテ死スルモノアレハ親戚ヨリ教正ニ願
フテ故ラニ死者ニ代リテ適當ナル判者ヲ選定シ果シ
テ本人カ臨終ニ遺囑ヲ為スニ方テ此ノ判者ト協議シ
テ財産ヲ贈附スルカ如キ例規ヲ履行セサル可ラス又
人民預シメ金錢ヲ以テ僧侶ノ免許ヲ買フニ非サレハ
婚姻ノ初夜乃至之ニ續テ二夜夫婦同衾ノ歡ヲ享ル
能ハス是レ平日ハ人敢テ介意セス別ニ其ノ價ナキニ
依リテ特ニ合卺ノ三夜ヲ撰テ以テ勒索ノ計ヲ行フニ

在ルノミ以上皆ナ巴力門ノ矯正スル所ト為レリラゴ
ア一著述ノ佛國法律字彙ニ亞門ノ教正ニ對シテ頒布
シタル制令ヲ載スルヲ見ル

再ヒ本編ノ論題ニ復シテ一言セントス時世ノ今昔ヲ
論セス政體ノ純駁ヲ問ハス國中ノ諸黨各自權威ノ皇
張ニ熱心シ互ニ雄峙シテ相下ラス各自ノ利益ヲ專占
セント欲スルヲ一見シテ直ニ頽敗ノ微候ナリト斷定
スル片ハ往々謬見ニ陷キルヲ免レス抑モ人性ハ到底
一死ヲ遁ル可ラサレハ雄略大材ノ人ニシテ制節謹度
ヲ兼備スルハ絶テ無ク僅カニ有ルヲ得ヘク猛進勇往

シテ前途ニ趨ルハ却テ之ヲ停止スルヨリモ容易ナル
カ如ク上流ノ民ニ於テハ或ハ有徳ノ士ヲ見ルニ難カ
ラサレモ謹恪ノ人ヲ得ルハ甚タ容易ナラス

威權ヲ逞クスルヲ以テ得意ノ極ト為スハ人ノ常情ナ
リ好徳ノ君子ト雖モ自ラ愛辟スル所アリテ其ノ誠意
ヲ人ニ托シテ疑ハサルヲ大福ヲ享クルノ人ト看做ス
實ニ人生ノ行業ハ萬有ノ事物ニ依頼スルモノナレハ
善ヲ為スハ至テ易ケレモ之ヲ為シテ宜シキヲ得ルハ
極メテ難タシトス

第四十二回 羅馬法ノ再興及ヒ其ノ成果○諸

法院ノ改革

一千百三十七年ニジュスタニヤン帝ノ法例ヲ發見シテ以來羅馬法ハ恰モ死灰再燃ノ勢ノ得テ伊太利國ニ學校ヲ建立シ從來教習スル該帝ノ法典及ヒノフエラエト俱ニ生徒ノ課程本ト爲リ世人ニ尊信セラル、浅カラス殆ト倫巴多ノ法律ヲ蝕食スルニ至レリ

ジュスタニヤン帝ノ法例ヲ編纂セシハ諸蕃民カ高盧地方ニ遷移セル後ニ在リ當時該地方ハ唯タテオドシエスノ法典一部ヲ有セシノミナレハ伊國ノ法學士ガジュスタニヤンノ法例ヲ齎ラシテ佛國ニ來ルニ方テ

頗ル之ニ抵抗スル者アリ加フルニ教主ハ教會律ヲ保持セント欲シテ之ヲ遵行スル者ヲ宗門禁絶ノ法ニ處シテ攻撃ヲ試ミタレハ掃攘ノ功ヲ奏スルニ至ラス之ニ反シテ聖王路易ハ羅馬法ノ功用ヲ世人ニ傳播セン
 一ヲ希望シテ特命ヲ以テ翻譯ノ業ニ着手セリ即チ我國ノ文庫ニ保存スル所ノ寫本ニシテ大ニ此ノ譯書ノ精神ヲ採取シ以テ其ノ律例ヲ編纂セリト云フ良王非立ニ至テジュスタニヤンノ法例ヲ教授スルヲ命令シ而シテ慣例ニ因循スル州郡ニ於テハ之ヲ以テ帝ニ論理ノ法學書ニ供スルノミナレハ其ノ既ニ羅馬法ヲ

用ウル所ニ於テハ直チニ實施ノ作用ヲ有シタリ
既ニ論述スルカ如ク格闘審法ヲ用キテ訴訟ヲ裁斷ス
ルニハ更ニ學識ヲ法官ニ望ムヲ要セス特リ各地ノ慣
習ト故老ノ口碑ニ傳フ所ノ舊慣ニ從テ容易ニ爭論ヲ
判決スルヲ得ヘシボーマノイルノ時世ニハ二様ノ裁
判法アリ其ノ一ハ訴人ノ同輩ニ於テ審問ヲ加ヘ各法
院ノ慣例ニ循テ之ヲ裁判シ其ノ一ハ家宰耆老ニ舊慣
ヲ問ヒ其ノ放示ニ從テ之ヲ裁判ス其ノ章程甚タ簡易
ニシテ必シモ學識才略ヲ兼備スルヲ要セサリシカ其
ノ後數百年ノ間埋没シタルジュエスチニヤン帝ノ法典

驟カニ世間ニ出テ光輝ヲ放チ羅馬法ノ譯業漸ク竣ヲ
告ケテ官立學校ノ教科書ニ列シ、訴訟法、裁判法ノ章程
漸ク一科ノ學術ヲ成シ、法律ノ學士實地ノ訟師相並ヒ
テ専門ノ業ヲ開クニ至リケレハ既ニ訴人ノ全輩、土地
ノ耆老ハ其ノ訟獄ヲ聽斷スル學識才器ナキヲ以テ此
ノ輩ノ足跡漸ク主公ノ法庭ニ遠サカリ主公ニ於テモ
モ亦タ強テ之ヲ召集セス加之新定ノ裁判法ハ規則簡
便ニシテ嚴重ナラス大ニ豪族武家ノ氣象ニ投合セサ
ルカ故ニ豪族武家ニ於テモ更ニ奮發シテ之ヲ學習シ
之ニ通達スル者無シ且又同輩ノ審問法益衰微スルニ

從テ家宰ノ裁判ハ益確立セリ蓋シ家宰ハ從來親ラ裁判ヲ施行セス唯ク證左ヲ徴シテ之ヲ耆老ニ送致シソノ判斷ヲ請フニ過キサレ氏耆老其ノ權ヲ放棄スルニ至テ親ラ審庭ニ坐シテ裁判ヲ宣告シタレハナリ
右改革ノ舉速カニ緒ニ就テ更ニ人民ノ視聽ヲ驚カサザル所以ハ常ニ敎會法院ノ實際ヲ目撃スルカ故ニシテ其ノ舊慣法ヲ破滅セシハ全ク敎會律羅馬法合併ノ作用ニ由レリ

於是撒利律集會法例乃至佛國第三朝ノ古法家ノ著述ニ於テ見ル所ノ古來王國ニテ恪遵セル大則即チ一人

ニテ裁判ヲ宣告ス可ラサルノ慣例ハ一朝地ニ墜タリ而シテ其ノ之ニ因テ地方ノ法院ニ所生ノ弊害一人裁判ニシテ都府ニ至テハ特ニ法官ノ義務トシテ二人ノ得業生ヲ撰テ法院ノ參佐ト爲シ若シ肉刑ヲ加フヘキ訟獄アルニ會ヘハ則チ該參佐ヲシテ舊法ノ耆老ニ代リ法官ニ向テ擬罪ノ當否ヲ評議セシメ且ツ上告法ヲ容易ニシテ以テ民情上達ノ路ヲ開キ頗ル矯正ノ效ヲ得タリ

第四十三回 全上

據此觀之更ニ法律ノ作用ニ因テ主公カ法院ヲ開ク

ヲ禁制セシメテナク、其ノ全輩ノ職務ヲ廢止セシメテナク
新タニ家宰ノ職ヲ置キ之ニ裁判權ヲ授與セシメテナシ
此ノ數事ハ皆ナリ時勢人情ニ催サレテ自然ニ改革ノ果
ヲ結フモノニシテ夫ノ羅馬法ヲ學習シ法院ノ章程ヲ
知リ新定ノ慣例ニ通スルカ如キハ多少潜心研究ノ工
夫ヲ積マサル可ラス貴族愚氓ノ敢テ企テ及フ所ニ非
サルナリ

此ノ改革ノ事ニ就テ今日尚ホ存スル所ノモノハ主公
ニ命シテ俗人ノ中ヨリ家宰ヲ撰任セシムルノ制令是
レナリ此ノ制令ヲ視テ新タニ家宰職ヲ置ク法制ト為

スハ謬見ナリ制令ノ文中更ニ其意ヲ含ムヲナシ之ヲ
頒布シタル理由ニ依リテ制法者ノ精神ヲモ窺フニ足
レリ何ヲカ頒布ノ理由トス蓋シ當時ノ法制僧徒ノ身
ニ刑罰ヲ加ヘサルヲ以テ家宰ヲシテ曲言詭行ノ責ヲ
保任セシメルト欲スルニハ之ヲ俗人ノ中ヨリ簡撰セ
サルヲ得サレハナリ

當時王室ニ貴族カ享ケ得ル所ノ特准ヲ收攝スルヲ視
テ政府ハ其ノ僭篡セルモノヲ褫奪セシナリト想像ス
ヘカラス蓋シ歲月ヲ經ルノ久シキ人運世情屢變遷ス
ルヨリ舊慣故習ハ自ラ以テ當時ノ風潮ニ逆航シ能ハ

サルニ依リ貴族ニ於テ或ハ之ヲ固執スルヲ怠リ或ハ之ヲ放擲シタルニ由レリ

第四十四回 證據覈驗法

慣例舊習ノ外更ニ准依スヘキ規則アラサルニハ法官審庭ニ臨テ訴訟ヲ聽クニ唯タ證人ヲ審問スルノ一途ノルノミ

格闘審法ノ慣例衰微シテヨリ文書ニ依テ事實ノ顛末ヲ審問セリ然レモ口述ノ語ヲ筆記シタル證左ハ事實口述ニ異ナラス唯タ訴訟ノ費用ヲ増加スルノミナレハ新タニ規則ヲ制定シテ從來ノ審問法ヲ廢止シ更ニ

人民ノ録事官ヲ設テ族籍年齡嫡庶ノ別婚姻等ノ履歷ヲ詳記セシメタリ是レ極メテ動カシ難キ證左ハ文書ニ若クハナキヲ以テ口述ノ慣法ヲ改メテ文書ニ記シタリ辭ヘハ某乙ノ某甲ノ子タルヲ知ラント欲スルニハ出生簿ヲ繙ケハ一閱ノ下ニ判然ト之ヲ知り得ヘク之ヲ口上ノ審問ニ比較スルニ煩簡便否ノ差霄壤啻ナラス其ノ理アルヲ論ヲ俟タサルナリ概シテ之ヲ言ヘハ一國中ニ數多ノ慣例アルニ方テハ各人ヲシテ各事ニ就テ證左ヲ立テシムルヨリモ寧ロ一部ノ法典ヲ編輯シテ之ヲ全載スルノ容易ナルニ若カス其ノ後著

名ノ制令ヲ頒布シテ凡ソ百金以上ノ貸借訴訟ニ於テハ當初ヨリ文書ノ證左ヲ除ク外一切口證ノ陳述ヲ受理セサルヲト爲レリ

第四十五回 佛國ノ風俗慣習ヲ論ス

既ニ論セシカ如ク佛國ハ成文ノ慣習律ヲ遵行シ而シテ各私領ニハ各其ノ土地ノ慣例アリテ民法ノ作用ヲ成セリポーマノイルハ各地ノ民法各異ナリ假令全國ヲ周遊シテ私領ノ二地ニ一法ノ行ハルハヲ見ント欲スルモ決シテ得ハカラスト斷言セリ當時ノ法制ヲ考證スヘキ炬光トモ稱スヘキ該氏ノ論スル所ナレハ宜

シク之ヲ信據スヘシ

斯ク法門ニ多岐ヲ生セシ所以ハ二層ノ原因アリテ然リ第一ハ讀者ノ記憶ニ存スルカ如ク各私領ノ郷慣土俗相同シカラサルニ由リ^{第十二回}第二ハ格闘審法ヲ准行シ偶然ノ勝敗ニ依リテ訟訴ノ曲直ヲ判定セシカ故ニ勢許多ノ慣習ヲ生セサルヲ得サルニ由レリ

此等ノ慣習ハ故老ノ口碑ニ存シテ自然ニ成文ノ慣習ト爲レリ

第一佛國第三朝ノ諸王ハ人民ニ特許狀ヲ受與スルニ止マラス一般ノ免許狀ヲモ頒付セリ非立奧古斯多王

聖王路易ノ法制ノ如キ是レナリ之ニ齊シク封土廣大ナル侯伯ハ受封ノ地主ト協議シテ各自法院ノ事情ニ應シテ免許狀ヲ授與セリ不列多屈伯ゴットフレイカ頒布シタル貴族分配ノ讞文、ラルフ公カ制定シタル諾曼埜ノ慣例、アオバルド王ノ三鞭ノ慣例、モントフォールド伯シムモンノ法律等ノ如キ是レナリ此等ノ諸慣例ノ中或ハ成文律ト為リテ普通ノ作用ヲ得ルモノナキニアラス

第二佛國第三朝ノ初世ニ方リテ平民ハ概メ皆ナ奴隸ノ身分ヲ脱セサリシカ後ニ國王地主ヨリ之ニ自主權

ヲ授與セサルヲ得サルノ理由ヲ生スルニ至レリ

奴隸ヲ解放スルニ就テハ主公ヨリ財産ヲ給與セサルハカラス既ニ財産ヲ所有セシムルキハ之ヲ處分スヘキ民法ヲ制定セサル可ラス又主公ハ奴隸ヲ解放スルカ為メニ其ノ財産ノ幾分ヲ失却セサルヲ得ス既ニ之ヲ失却スレハ之ヲ償フニ足ルヘキ權理ヲ保存スル所ノ法律ナカル可ラス此ノ二事ハ皆ナ奴隸解放ノ免許狀ニ依リテ整理セラレテ慣例ノ一部ト為リ而シテ之ヲ再ヒ文書ニ記シテ成文律ト為セリ

第三聖王路易及ヒ其ノ後ノ諸王ノ世ニ當テデフオン

テン、ボーマノイル等ノ如キ法律練達ノ諸子輩出シテ
州郡ノ慣例ヲ編纂シテ書冊トナセリ其ノ趣旨タル蓋
シ裁判法ノ方向ヲ指引スルマテニテ敢テ財産處分ノ
慣例ヲ掲記スルニ非ス然レモ各地慣例ノ全豹ヲ示レ
テ遺漏ナケレハ諸子ノ記録スル所ハ啻ニ著明ノ事實
ニ限り且ツ官撰ノ效力ヲ有セスト雖モ之ニ依リテ大
ニ佛國裁判法ノ古制ヲ回復スルヲ得タリ是レ佛國當
時ノ慣習律ナリ

茲ヨリ以下將サニ著明ナル年紀ニ説キ到ラントス甲
列王第七世及ヒ其ノ後諸王ノ命ヲ以テ全國各地ノ風

俗慣習ヲ書冊ニ筆記シ其ノ要領ヲ集成スル例格ヲ一
定シタリ抑モ此ノ事業ハ諸州ヲ通シテ慣例集成ノ業
ニ從事セシノ各私領ノ人民ヲ州會ニ召シテ成文ト否
トニ拘ラスソノ土地ニ准行スル所ノモノヲ明言セシ
ノ故ラニ私人ノ利益ヲ妨害セシテ各地ノ慣例ヲシ
テ同一ニ歸向セシムルヲニ注意セリ於是我國ノ慣習
法ハ第一ニ不文律ヨリ成文律ニ變シ第二ニ普通一般
ノ軀裁ニ歸シ第三ニ王室ノ撰集ニ係リ併セテ三様ノ
性質ヲ具ヘリ

此ノ慣習律ハ新タニ集成セルモノ甚タ多キニ居ルヲ

以テ或ハ現行ノ法律ニ適當セサルモノヲ削除シ或ハ
實際ノ事情ニ應スルモノヲ増補シテ屢更正變革ヲ經
歴シタリ

我國ノ慣習律ハ原ト羅馬法ト判然畛域ノ別アルヲ以
テ二法ノ作用相反セルノ想像ヲ懷クヲ免カレスト雖
凡我カ慣例中ニ羅馬ノ法則ヲ參用スルモノ亦尠ナ
レトセス就中其ノ集成ハ今ヲ距ル尚ホ久シカラサル
時ニ在リテ而モソノ法律羅馬ハ吏務ヲ以テ筮仕スル人
ノ專ラ脩ムヘキ學問ニ屬シ人民ハ其ノ識得スヘキ義
務ヲ知ラス却テ識得スヘカラサルヲ知ルヲ誇揚ス

ルノ時風ニアラス聰明敏捷ハ以テ職業ヲ學フ階梯ニ
レテ之ヲ文飾スル具ニアラス不斷ノ豫樂自ラ粉黛ノ
氣風ヲ脱却セル時世ニ於テハ其ノ羅馬法ヲ參用セシ
ヤ必然疑フ可ラサルナリ

若シ筆鋒ヲ詳細ノ事項ニ向テ上告法ノ開設ヨリ生ス
ル所ノ諸改革即チ我カ佛國裁判權ノ全體ヲ論述セハ
大ニ此ノ一回ノ文章ヲ擴張スヘシト雖モ言論冗長ニ
渉ルヲ恐レテ筆ヲ茲ニ擱キタリ予ハ恰モ稗史ニ記セ
ル考古氏カ鄉國ヲ去リテ埃及ニ赴キ巨塔ヲ一見スル
ノミニテ更ニ登臨ヲ試ミシテ空ク歸途ニ就クカ

如レ

作日 龍 版

萬法精理卷之二十八 下終

萬法精理卷之二十九

何 禮之 譯

法律編制論

第一回 制法者ノ精神ヲ論ス

此ノ書撰述ノ趣意ハ必竟制法者ノ精神ハ須ラケ寬嚴
ノ中ヲ得ルヲ要スルヲ證示スルニ外ナラス是レ予
カ考案ニシテ論辨ヲ憚ラサル所以ナリ抑モ善政ハ猶
ホ美德ノ如ク常ニ一極ニ偏倚スル弊ナレ即チ左ニ其
ノ例鑑ヲ掲記セシ

人民ノ自由ヲ保護スル為メニハ裁判ノ章程ヲ設定セ

高澤米子 卷之二十一 何日蒲尼
サル可ラス然レモ數多ノ規則中或ハ當初立法ノ目的
ニ背馳スルモノ無キヲ保セス或ハ章程繁苛ニ失レ或
ハ財産鞏固ナル能ハス或ハ審問ノ疎漏ナルヨリ甲ノ
財産ヲ乙ノ所有ニ斷決レ或ハ徒ニ糾査中ニ時日ヲ費
シテ原被兩造ノ損害ヲ招ク等諸弊叢生シテ己マス果
シテ然ラハ國士ハ自由安固ヲ損失レ告訴人ハ罪犯懲
治ノ效ナキヲ患ヒ被告ハ其ノ冤枉ヲ伸雪スルニ道ナ
カルヘレ

第二回 全上

塞西留ハ羅馬ノ十二銅表ノ律典ニ債主ニ義務ヲ履行

シ能ハサル負債者ヲ寸斷スルヲ許容スルヲ論シテ
苟クモ人民ヲレテ自己ノ資力ヲ超エテ他人ニ假借ヲ
告クルヲ勿ラシムルヲ得ハ法律ノ慘酷ニ流ル、モ敢
テ咎ムヘキニ非ストマデニ放言セリ然ラハ則チ至良
ノ法律ハ慘酷ヲ極ムルニ在リ善良ノ治ハ事物ノ適度
ヲ超ユルニ在リテ都テ輕重ノ權衡ヲ破壞スルヨリ成
立スト謂フヘキカ

第三回 陽ニ制法者ノ趣意ニ背馳スルカ如キ

法律往々民心ニ應合スルヲアルヲ論
ス

梭倫ノ法律ニ國內ノ叛亂ニ關係セサルモノヲ卑屈無耻ノ小人ト認メタルハ大ニ怪シムヘキカ如シト雖モ熱ラ當時ノ形勢ヲ察スレハ亦タ事情已ヲ得サルニアルヲ悟了スヘシ當時希臘ノ國勢四分五裂シテ共和ノ政體確立セサレハ若シ老成ノ人政黨ニ干連セス退テ一身ノ安逸ノミ是レ謀ルキハ輕舉妄動止マル所ヲ知ラサルニ至ルヘシ是レ此ノ法律ヲ成定セシ所以ナリ小國ノ騷亂ニハ之ヲ首唱シ或ハ之ニ加勢スル國士必ス其ノ半ニ過クヘシ大國ハ否ラス徒黨ハ一國ノ少數ニ止マリテ自餘ノ人民ハ各自生業ノ安堵ヲ希圖シテ之

ニ黨與セス故ニ大國ニ在テハ亂黨ヲ招撫シテ多勢ナル國士ノ中ニ編入シ以テ反正ノ計ヲ求ムヘシト雖モ小國ニ於テハ少數ナル謹恪ノ國士ヲ誘唆シテ亂黨ニ加ハラシメ以テ鎮定ノ策ヲ施サ、ル可ラス恰モ一滴ノ冷水ヲ加ヘテ沸湯ヲ止ムルカ如シ

第四回 制法者ノ趣意ニ背馳スル法律ヲ論ス
法律ノ作用全ク預圖スル所ニ反シテ制法者ト雖モ自ラ其ノ然ル所以ヲ會得セサルモノ鮮ナカラス我カ佛國ノ法律ニ凡ソ甲乙二人ニテ一個ノ寺領ヲ爭フ際若シ其ノ一人死スルキハ該件ハ生存者ノ所有ニ歸スヘ

キ規則ナリ制法者ノ精神ヲ窺フニ全ク爭論ノ速カニ
完結センコトヲ欲シテ之ヲ制定セシナルヘシ然ルニ其
ノ應效ハ期望ノ外ニ出テ此ノ法律ノルカ為メニ僧徒
ノ爭訟日ニ月ニ多キヲ加ヘテ止マス其ノ狀猶ホ猛犬
相噬テ放タス互ニ敵手ノ斃ル、ヲ俟ツモノ、如シ

第五回 全上

茲ニ説キ来ル所ノ法律ハイヌチネス雅典ノ政論家紀
元前三百九十七
年ニ保守セルアムフ中チヲン會議員ノ誓辭ニ之アル
ヲ視ルヘシ其ノ詞ニ云ク我ハ誓テ同盟ノ府邑ヲ毀タ
サルヘシ誓テ水流ヲ更改セサルヘシ若シ此ノ二事ヲ

犯スノ國民アテハ速ニ兵ヲ發シテ其ノ府邑ヲ毀ツヘ
シト此ノ末條ノ一句ハ前條ノ趣意ヲ確定スルカ如シ
ト雖モ其ノ實ハ前後矛盾スルコト免レス故ニアムフ
中クチオン會盟ノ本意ハ希臘諸府邑ヲ永久ニ保存セ
ント欲シテ却テ之ヲ毀壞スルノ釁端ヲ開クト謂ハサ
ルヲ得ス若シ該會盟ニ於テ希臘ノ諸國民ノ為メニ正
當ナル國際法ヲ創定セント欲セハ須ラク人民ノ思想
中ニ夙ニ希臘ノ府邑ヲ毀ツコトノ蠻俗惡ムヘキヲ識得
セシメサル可ラス既ニ此ノ思想アル以上ハ我ヲ毀タ
シトスル敵人ノ府邑ト雖モ我ヨリ之ヲ毀ツヘキ法律

ヲ制定ス可ラス該會盟ノ法律ハ公平允當ナレ其ノ
制定ノ後未タ幾クナラス馬基頓王腓立カ兵力ニ仗リ
テ諸府邑ヲ屠滅セシモ全ク希臘人カ列國公法ヲ違犯
セルヲ以テ口實ト爲シタリ此ノ弊害アルヨリ之ヲ言
ヘハ未タ慎密ヲ極ムトスヘカラス該會盟ノ爲メニ之
ヲ謀ルニ譬ヘハ滅亡セル府邑ノ宰官數名若クハ叛軍
ノ將士ヲ死刑ニ處スルニ止マリ亡國ノ人民ヲシテ一
時希臘人ノ特准ヲ享用スルコトヲ得セシメス再ヒ建
國ノ運ニ至ルマテ一定ノ罰鍰ヲ納メシムルカ如キ罰
則ヲ議定スルニ若カス之ヲ要スルニ法律ノ正鵠ハ就

中損害ヲ賠償スルノ一事ニ歸着セサル可ラス

第六回 同様ノ法律ニシテ成績相異ナルヲ
論ス

諛撒ノ制定ニ係ル民家ニ錢貨六十セスデル以上ヲ藏
ムルヲ禁止シタル法律ハ富家ヲシテ貧人ニ假貸ス
ヘキ義務ヲ負擔セシメ貧人ヲシテ負債ヲ償還スヘキ
資力ヲ得セシムルカ故ニ當時羅馬ノ情勢ニ於テ互ニ
能ク貸主負債者ヲ和睦セシムルノ肯綮ニ中レリ然ルニ佛
國ニ於テハ財政極難ノ時ニ全一ノ法律ヲ制定シテ初
メ貨幣流用ノ通路ヲ塞キ後ニハ之ヲ蓄藏スルヲモ

許容セス其ノ實ヲ言ヘハ勢力ヲ以テ民財ヲ劫奪スル
ニ異ナラス終ニ非常ノ禍患ヲ釀成セリ斯ク同様ノ法
律ニシテ異狀ノ成績ヲ現シタル所以ハ他ナシ該撒ハ
錢貨ヲ流通セシムルノ精神ヲ以テ法律ヲ制定シ佛國
執政ノ趣意ハ之ヲ一手ニ收攬スルニ在ルヲ以テ羅馬
ニ於テハ錢貨ニ換フルニ土地若クハ相當ノ物貨ヲ用
キタレト佛國ニ於テハ人民ヲ強迫シテ更ニ價ナキ假
貨ヲ通用セシメタリ

第七回 全上 法律ヲ規畫スルニハ其ノ當ヲ
得サル可ラサルヲ論ス

雅典阿爾胡失拉古ノ三邦皆ナ介殼彈劾法ヲ用キタリ
然ルニ特リ西刺久ニ於テハ之ヲ制定スルニ其ノ宜ヲ
得サルヲ以テ弊害百出シ苟クモ名望ヲ負ヘル國士ハ
皆ナ手ニ無花果ノ葉ヲ持シテ陸續身ヲ遯レテ去リ國
中更ニ賢材ヲ見ス雅典ハ之ニ反シテ制法者ノ聰明能
ク之カ限界ヲ定ムヘキトニ注キ到リレカ故ニ政術上
ノ一良法ト為レリ其ノ法一時ニ一名以上ヲ彈劾スル
トヲ許サス又人民ノ指名スル所必ス一人ニ歸セサレ
ハ之ヲ舉行ス可ラス故ニ一日モ國ニ容レ難キ巨奸大
慙ニ非サルヨリハ更ニ之ニ當ルモノナシ

放竄ノ刑ヲ施行スル人民ノ權ハ五年ニシテ僅カニ一
回ニ過ク可ラス殊ニ介穀彈劾法ニ至テハ特リ之ヲ國
患ヲ釀スヘキ非常ノ人ニ限リテ行フヘキヲ以テ決シ
テ平常ノ機務トシテ視ル可ラサルナリ

第八回 陽ニ全様ノ法律ニシテ之ヲ制定セル

本意常ニ齊シカラサル事

佛國ニ於テハ大抵羅馬ノ「ユエブスチ、ユーシヨシ」遺贈
ヲ受クル者其ノ生存中ニ贈物ヲ保有シ死後ニ至テ當
テ贈遺セル者ノ定メ置タル人ニ右財産ヲ讓與スヘキ
契約ヲ云フ姑ラク替ヲ採用シタレハ溯テ其ノ本意ヲ
襲者ノ譯字ヲ填ス尋ヌル片ハ全ク羅馬人ト相異ナレリ蓋シ羅馬人ノ遺

業相續法ハ教會律ノ作用ニ依リテ多少相續人ノ損失
タルヲ免レス故ニ相續人ヲ定メスレテ死スルカ為メ
ニ死後相續人ヲ奴隸ノ苦界ニ沈メ或ハ故ヲニシユブ
スチ、ニ「シヨシ」ヲ設クテ以テ榮譽ヲ顧ミサルモノ
ト認取スト雖モ我カ法律ニ於テハ唯ク初ヨリ相續人
ヲ偽立シ或ハ指名ノ相續人ニ於テ遺業ヲ襲フヲ肯
ヤサル片ニ設定スル所ノ替代人ニ此ノ弊習アルヲ知
ルノミニシテ立法ノ原意ハ永ク一姓ニ基業ヲ保續セ
レノス他人ノ之ヲ領受スルモノヲ求ムルニ外ナラズ

第九回 希臘羅馬二國ノ法律齊シク自殺ヲ罰

レタレ其ノ本意自ラ同シカラサル
事

普拉多言ヘルアリ若シ官憲ノ命ニ依ラス耻辱ヲ免
カルカ為ニアラス唯ク臆病怯心ニ勝ヘスレテ一身
ノ至戚即チ親ラ性命ヲ戕フ人ハ之ヲ懲罰セサル可ラ
スト羅馬ノ法律ニ於テハ臆病怯心ノ發作ニ依ラス生
活ニ倦ムノ故ニアラス苦痛ニ堪ヘ難キニアラス唯ク
罪ヲ犯セルニ因テ自ラ生存ノ望ヲ絶テ其ノ身ヲ殺
スモノヲ懲罰セリ然レハ羅馬人ハ希臘人ノ所罰ヲ赦
レテ其ノ所赦ノモノヲ罰セシナリ

普拉多ノ法律ハ蓋シ希臘ノ政體ニ於テ官憲ノ命令ハ
無限ノ權ヲ有シ耻辱ハ人生最大ノ苦患ニ係リ臆病怯
心ハ不可赦ノ重罪ト認メシキニ制定スル所ナレハ羅
馬人ハ更ニ此ノ如キ深意アルニアラス全ク經濟上ノ
見點ヨリ之ヲ制定セシナリ

羅馬ニ於テモ共和政ノ頃ニハ曾テ自殺スル者ヲ懲罰
スルノ法律アルヲ見ス史人ノ筆モ絶テ此ノ舉ニ貶辭
ヲ下シタルヲ無シ

帝國タル初メ羅馬ノ巨室續テ法網ニ罹リテ身家ヲ
滅亡スルモノ斷ヘサルヨリ或ハ自ラ一死ニ甘心シテ

獄吏ノ手ニ辱シメラル、トテ避クルノ風習行レテ漸ク俗ヲ爲シ而モ當時自殺ノ禁アラサレハ既ニ自殺ヲ遂ルカラハ人品相當ノ葬禮ヲ行フヲ得ヘク且ツ遺囑ニ從テ財産ヲ處分スルヲ得ヘキカ故ニ間接ノ利益頗ル鮮カラスト雖モ殘暴ノ君續テ位ニ登リ加フル一貪婪厭クトヲ知ラサルヲ以テ更ニ法制ヲ改メテ凡テ刑典ニ羅ルトテ憤リテ自殺スルモノヲ罪犯ト認メ之ニ依リテ死後ニ財産ヲ保存スヘキ方便ヲ剝奪セリ諸帝ノ本意ハ原ト籍沒ニ當ラサル罪ニ坐レテ自殺スル人ノ財産ハ之ヲ籍沒セサルトテ許容セタリ

第十四 異様ノ法律ニシテ其ノ精神ヲ同シク

スル事

今日我カ法律ニ於テハ人民ヲ其ノ家ヨリ召喚スルヲ得レト羅馬ニ於テハ之ヲ行フトテ許サス

羅馬ノ召喚狀ハ通常ノ文書ト異ナリテ殆ト人身捕縛票ノ作用アリ故ニ當時人ヲ其ノ家ニ就テ召喚スルヲ得サルハ猶ホ今日負債アルノ故ヲ以テ濫リニ人家ニ入リテ之ヲ捉フトテ許サハルカ如シ

古今ノ法律其ノ外形ヲ殊ニスルモ各人ノ家ヲ安身ノ地ト認メテ保護ヲ加ヘ敢テ強暴ヲ受ケサラシムルノ

主義ニ至テハ未タ曾テ同レカラサルハ無キナリ

第十一回 法律ノ異同ヲ辨別スル方法如何

佛國ニ於テハ偽證ヲ重罪トシ罰ヲ加フレモ英國ニ於テハ否、右二法ノ良否ヲ辨別セント欲スルニハ必先ツ二國法制ノ全體ヲ參觀比照セサル可ラス佛國ニ於テハ犯人ヲ拷訊スト雖モ英國ハ之ヲ許サス佛國ニ於テハ犯人ニ證人ヲ出ス一ヲ許サス又犯人ノ罪ヲ輕減スルカ爲メニ之ニ關係セル憑據ヲ聽容スルヲ至テ罕ナレモ英國ニ於テハ齊シク兩造ノ證人ヲ受理ス以上ノ三項彼是互ニ密附ノ關係ヲ有シテ佛國ノ法律ヲ組

織ス英國ニ於テモ亦タ然ラサルハ无シ英國ノ法律ハ拷訊法ヲ用キサレハ罪人ヲシテ犯狀ヲ招出セシムルヲ甚ク容易ナラサルカ故ニ嚴刑ヲ用キテ人心ヲ威懾セシメス勉メテ證人ヲ諸方ヨリ招徠ス佛國ノ法律ハ證人カ憐心ヲ懷クヲ顧慮セサルノミナラス故ラニ之ヲ威懾セシメテ特リ一方ノ證人即チ檢事長ノ訴狀ノミヲ受理スルヲ以テ犯罪ノ有無ハ全ク諛官吏ノ一言ニ決定ス之ニ反シテ英國ハ齊シク兩造ノ證人ヲ審問シ敢テ憑據ヲ一方ニ置カサレハ適偽證ヲ立ルモノアリト雖モ更ニ他ノ證人ヲ以テ之ヲ辨護スルヲ得レハ

之ヲ以テ大害ト為スニ足ラス是故ニ若シ兩國ノ法律
孰レカ最能ク正理ヲ得タルカヲ辨別スルニハ人其
ノ一端ヲ執テ論スルヲ須ク活眼ヲ全體ニ注射セ
ンヲ要ス

第十二回 同様ノ法律ニシテ往々其ノ實ノ相
異ナル事

希臘羅馬ノ法律ハ盜品ノ買主ヲ罰スルニ盜賊ト全一
ノ刑ヲ用キタリ我カ佛國ニ於テモ亦タ然リトス抑モ
希臘羅馬ノ法律ニ於テハ右二者ヲ全視スルノ理アレ
氏我國ニハ之アラサルナリ何トナレハ右二舊國ノ法

律ニ據レハ盜賊ノ罪ハ罰鍰ヲ以テ贖フヲ得レハ盜
品ノ買主ヲ罰スルニモ亦タ贖罪ノ法ヲ施行シテ妨ケ
ナシ凡ソ他人ニ損害ヲ與フモノハ其ノ情狀ノ如何ヲ
問ハス齊シク之ヲ賠償セサル可ラサルノ法理アレハ
ナリ然ルニ我カ法律ニ於テハ盜賊ノ罪ハ極刑ニ當ル
ヲ以テ齊シク之ヲ盜品ノ買主ニ加フルハ過酷ノ弊ナ
キ能ハス夫レ買主ニハ原宥スヘキ種々ノ事情アリテ
其ノ罪ヲ不問ニ置クヲ得ルモ本犯タル盜賊ハ常ニ
罪ヲ遁ルノ路ナク買主ハ時トシテ罪證ヲ示シ難キ
アレ氏盜賊ハ現行ノ證據アリテ掩フヘカラス一ハ全

ク他ノ連累ニ係レハ一ハ親ヲ手ヲ下セル罪狀アリ殊ニ盜賊ヲ為スニハ多少ノ辛苦ヲ嘗メテ經營スル所ナレハ故ラニ其ノ法律ヲ犯觸スルノ心魂ニ至テモ亦ク買主ニ比スレハ一層ノ頑硬ヲ加フモノトス然ルニ民法ノ諸學士ハ更ニ一步ヲ進メテ買主ヲ惡ム「盜賊ノ罪ヨリ太甚シキモノアリ其ノ說ニ苟クモ買主アラサルヨリハ盜賊決シテ久シク踪跡ヲ匿クス「ヲ得スト此ノ論ノ如キ特リ罰鍰ヲ課スルノ法律ニ在リテ其ノ理アルノミ何トナレハ此ノ法律ニ於テ二者ノ罪ヲ問フハ齊シク損害賠償ノ一事ニ歸シ加フルニ

買主ハ概シテ盜賊ヨリモ資力ニ富ムノ故ニ依レハ極刑ヲ用キテ之ヲ罰スルノ法律ニ於テハ決シテ此ノ主義ニ循フヲ得ス

第十三回 法律ト之ヲ制定セル目的トヲ分離ス可ラス

羅馬ノ盜賊律

羅馬ノ法律ニテ現行ノ盜賊ヲ捕捉スルヲ公盜ト稱シ事後ニ發覺スルモノヲ私盜ト稱ス十二銅表ノ法律ニ掲クル所ハ公盜ハ婚齡以上ナレハ答罪ヲ加ヘ除籍シテ奴隸ト為シ婚齡ニ達セサルモノ

ハ答罪ニ止マル私盜ニ至テハ盜品一倍ノ罰鍰ヲ徴ス
ルニ過キス

ポルシヤン律ノ制定アリ士族ノ答罪ヲ廢シ其ノ籍ヲ
除シテ奴隸ト爲スノ刑名ヲ傳ムルニ及テ公盜ノ罰鍰
ヲ盜品ノ四倍ニ改メ私罪ハ從前ノ如ク二倍ヲ追徴セ
リ

右ノ如ク法律ニ公私二盜ノ罪名ヲ區別シテ其ノ罰ニ
輕重ヲ設クルハ一奇ト謂ハサルヲ得ス抑モ盜賊ヲ擿
發スルニ方テ之ヲ其ノ盜品ヲ所志ノ地ニ搬移スル以
前ニ於テスルモ或ハ其ノ後ニ於テスルモ決シテ犯罪

ノ性質ヲ更改スヘキ事情ト爲スニ足ラス予カ推測ニ
據レハ羅馬ノ盜賊律ノ真理ハ全ク淵源ヲ希臘ノ法制
ニ資リシト更ニ疑ヲ容レス蓋シ斯巴爾他ノ制法者リ
クルガスノ本意ハ國士ヲ薰陶シテ剽悍狡黠ノ風俗ヲ
成サントヲ欲シ乃チ制令ヲ出シテ兒童ニ盜賊ノ術ヲ
習練セシメ若シ進退遲鈍ニシテ現地ニ捕捉セラルハ
者アレハ直ニ鞭答ヲ加ヘテ痛ク之ヲ懲責シタリ是レ
希臘ニ於テ始メテ公私二盜ヲ區別スル原由ニシテ羅
馬人ハ之ヲ因襲スルモノナリ

羅馬人ハ盜罪ヲ犯セル奴隸ヲ捕ヘテタルセマンノ斷

崖ヨリ投下セリ曾テ希臘ニ於テ見サル所ノ刑罰ニシ
テリクルゴスノ盜賊律ハ奴隸ノ為メニ制定シシモノ
ニ非ス然ルニ羅馬人カ特リ此ノ一事ニ於テ希臘人ト
其ノ趣ヲ殊ニシタルハ其ノ實之ヲ襲用スルモノナリ
羅馬ニテ若シ現行盜犯ヲ以テ婚齡以下ノ人ヲ捉フキ
ハプリートル官民憲ヨリ命レテ相當ノ答刑ニ處スル
猶ホ斯巴爾達ノ古制ニ於ルカ如シ此ノ法制ハ初メ希
臘人カクレタン人ノ遺俗ヲ採取スル所ニシテ由來極
メテ久遠ナリ故ニ普拉多ハ其ノ全ク國民ノ義勇ヲ培
植スルノ他アラサルヲ示サント欲シテ左ノ風俗ヲ

援テ之ヲ證明セリ云ク私闘ノ苦痛ヲ忍ビ且ツ公盜ノ
刑罰ニ堪ユヘキ氣節即チ權カナリト
民法ト政圖トハ俱ニ齊シク一社會ノ爲メニ制定スル
所ナルヲ以テ民法ハ多少政圖ニ關係ヲ有セサル可
ス故ニ凡ソ他國ノ民法ヲ移植スルニ際シテハ必ス先
ツ彼此二國ノ政體治圖ヲ檢覈シテ其ノ異同ヲ辨明ス
ルヲ要ス
故ニクレタン人ノ盜賊律ヲ斯巴爾達ニ採用セシ時ニ
ハ其ノ政體憲法ヲモ全シク移植セシニ依リテ二國ノ
法律更ニ抵牾セス一樣ノ效驗ヲ得タリ然ルニ之ヲ斯

巴爾達ヨリ羅馬ニ傳フニ及テハ二國ノ憲法相全シカラサルヲ以テ愛ニ羅馬ノ民法ニ輯和セス人心ニ浹洽スルヲ能ハサリキ

第十四回 法律ト之ヲ制定セル時勢事情トヲ分離ス可ラサル事

嘗テ雅典ニ於テ凡ソ府城攻圍ヲ被ムル時ニハ悉ク無用ノ人民ヲ殺スヘシトノ法律ヲ制定布告セリ此ノ法律ハ實ニ聞者ヲシテ寒心ニ堪ヘサラシムト雖モ原ト列國公法ノ未タ善良ノ極點ニ臻ラサルノ結果ニ外トラス何トナレハ希臘諸國民ノ公法ニ據レハ落城ノ人

民ハ自主權ヲ失シテ奴隸ト爲リ勝國人ノ買賣スル所ニ係レハ其ノ城邑ヲ取ルトハ即チ全ク之ヲ屠戮スルノ謂ニシテ圍城ノ中ニ在ル人ハ力竭テモ尚ホ固守シテ降ラス攻軍ハ危險ヲ顧ミスレテ攻戰スルノミナラス終ニ斯ノ如キ恐ルヘキ惡ムヘキノ法律ヲ制定スルニ至レリ

羅馬ノ法律ニ據レハ病客ノ診察ヲ怠リ或ハ技術ノ未熟ナルニ因テ醫師ヲ罰セリ而シテ其ノ人若シ官階ノ有シ或ハ財ニ富ムルハ其ノ刑ハ放寬ニ過キサレ且寒素ノ人ナレハ死罪ヲ適ル可ラス之ヲ我カ法制ニ比ス

レハソノ懸隔スルヲ霄壤帝ナラサルハ蓋シ時勢同シ
カラサレハナリ羅馬人ハ一丁字ヲ識ラスシテ醫藥ニ
從事スルヲ得レハ我カ國ニ於テハ然ラス學則課程ヲ
研究セシ試驗及第ノ士ニ非サルヨリハ醫業ヲ開キ治
術ヲ世ニ鬻クヲ得ス職業未熟ノ人之アルノ理ナケレ
ハナリ

第十五回 時トシテハ法律自ラ改正セサル可

ラサルヲ

十二銅表ノ法律ニ若シ盜賊追捕ヲ抗拒スルキハ晝夜
ノ別ナク之ヲ殺スモ妨ケナシ然レハ之ヲ殺スノ人ハ

必ス高聲ニ隣傍ヲ喊集セサルヘカラス是レ人民ノ手
ニ親ラ裁判權ヲ執ラシメサル所ニシテ法律上缺ク可
ラサルノ要領ナリ其ノ之ヲ喊集スルハ即チ現場ノ事
實ヲ他人ニ明示シ其ノ口證ニ依リテ無罪ヲ法官ニ鳴
訴スルニ當タルカ故ニ人民ハ事主ノ容貌舉動ヨリ四
邊ノ物色ニ至ルマテ現地ノ情況ヲ目撃シ罪ノ有無ヲ
査覈シテ以テ其ノ事實ノ已ムヲ得サルニ出タルヲ
承認スルヲ得ヘシ然リ而シテ如斯法律苟クモ其ノ當
ヲ失スルキハ大ニ國士ノ安固自由ヲ妨クヘキヲ以テ
現時現場ニ非サルヨリハ絶エテ之ヲ行フヲ許サス

第十六回 法律編制ノ際ニ服膺スヘキ大綱

夫レ自他ノ國民ニ代リテ法ヲ制シ律ヲ定ムヘキ大才
明智ノ人ハ殊ニ之ヲ編成スル方法ノ如何ニ三タヒ意
ヲ致サ、ルヘカラス

文辭ハ簡約ニシテ煩冗ナラサルヲ要ス十二銅表ノ律
文ハ三尺ノ兒童ト雖モ能ク之ヲ暗記ス取リテ以テ典
型トスヘシダユスチニヤンノ新法ハ曼衍ニ失ス其ノ
要ヲ撮ラサルハ理會シ難シ

文辭ハ亦タ平易簡明ナルヲ要ス其ノ紆餘深奧ナラン
ヨリハ寧口直筆達意ノ曉リ易キニ如カス抑モ天下ノ

通法ハ莊嚴ヲ事トスヘキニアラサレハ須ラク帝王ノ

貴キヲ忘レテ演說者ノ口吻ヲ學フヲ佳シトス若シ夫
レ法律ノ文辭ヲ誇張スルカ如キハ徒ニ之ヲ外見虚飾
ノ文具ニ供スト謂ハサルヲ得ス

各人ニ全一ノ感覺ヲ起サシムル即チ律文ノ精神ナ
リ佛國ノ賢相李知流ハ君主ニ向テ直チニ執政ヲ劾奏
スルヲ許容シタレモ若シ其ノ事實ヲ按シテ果シテ
緊急ノ事ニ繫ラサレハ彈者自ラ罰典ニ罹ルヲ免レス
ト議定シタリ此ノ一議以テ人民ノ口ヲ箝テ執政彈劾
ノ言路ヲ壅塞スルニ餘アリ何トナレハ緊急ノ事トハ

全ク之ヲ緩慢ニ比較シタル言語ニシテ甲者ノ緊急ト
スル所ハ未タ必スシモ乙者ノ緩慢ト見サランコトヲ保
チ難ケレハナリ

ホノリユスノ法律ハ自主民ヲ購フテ奴隸ト為シ或ハ
之ニ困難ヲ與フモノヲ罰スルニ死刑ヲ以テセリ人ニ
困難ヲ與フトノ一句ハ各人ノ意想ニ從テ見解全シカ
ラス如斯渺漠ノ言ハ律文ニ揭クヘキニアラサルナリ
若シ法律ニテ物價ヲ定ムヘキハ務メテ貨幣ヲ以テ
之ヲ估算セサルヲ要ス貨幣ノ價ハ時ニ昂リ時ニ低ク
變化常アラサレモ名位ハ始終一定シテ易ラサレハナ

リ夫ノ衆口ニ贈炙スル小説ニ昔シ羅馬ニ輕佻ノ少年
アリ常ニ拳ヲ揮テ路人ヲ毆テ而シテ后チ其ノ人ニ十
二銅表ノ法律ニ揭クル二十五錢ノ罰銀ヲ與フカ如キ
ハ全ク貨幣ヲ以テ物價ヲ定ムル法律ノ弊ナリ
一タヒ法律ニテ事義ヲ決定スル以上ハ再ヒ依違模稜
ノ言ヲ用ヰテ之ヲ紊ル可ラス刑獄ノ事ニ就テ路易王
第十四世カ頒定セル制誥ニ國王ノ親裁ヲ仰クヘキ案
件ヲ精細ニ枚擧シタル後ニ始終欽命法官ノ判定ニ從
フヘシトノ一章ヲ加ヘ之ニ依リテ既ニ決定セル章程
ヲ紊亂セリ

甲列王第七世ノ制誥ニ云ク訴訟ニ從事スルモノ慣習
法ニテ准行セル國例ニ背違シテ裁判宣告ノ後數月ヲ
經テ上告スルノ弊風アリ向後若シ檢事ニ欺詐ノ證據
アルカ或ハ上等法院ニ請求スヘキ大事故アルニ非サ
ルヨリハ即時ニ上告セサルヘカラスト此ノ法律ハ當
初立法ノ趣意ヲ破毀シテ終ニ三十年ノ間上告ヲ受理
スルト爲セリ

倫巴多ノ法律ハ教門ニ入ル婦人ハ未タ誓願ヲ立スト
雖モ婚姻ヲ約スルトヲ許サス其ノ理論ニ云ク旣ニ指
鐲ノ微物ヲ證據トシテ婦人ト契約ヲ結ヘル男子ハ他

ニ婚姻スルヲ以テ有罪ト認メラル、ニ非スヤ然ルヲ
況ンヤ躬ヲ上帝若クハ聖母ニ委スルモノニ於テヲヤ
必ス之ヲ禁セサル可ラスト予ハ以テ然リトセス法律
ノ精神ハ須ラク一ノ事實ヲ推シテ他ノ事實ニ及ホス
ヲ要ス決シテ事實ヲ推シテ想像ニ及ヒ想像ヨリ事實
ニ及ホス可ラス

孔斯且士制定ノ法律ニ云ク訟獄ヲ決斷スルニハ教正
一人ノ口證ニ依リテ充分ナリ他ノ證人ニ聽クヲ要セ
スト詎帝ハ人ヲ以テ事ヲ決シ爵位ヲ以テ人ヲ決ス寧
口速了ニ失スト謂サルヲ得ンヤ

法律ハ高尚ニ過ク可ラス法律ノ法律タル所以ハ全ク
凡庸ノ人民ヲ曉スニ止マリテ論理ノ學術ニ非サレハ
唯々其ノ家長日常ノ命令タランヲ要スルノミ
法律中必ス變則ヲ附シ或ハ之カ制限ヲ立テサルヲ得
サルノ外ハ寧ロ之ヲ減スルヲ決シテ之ヲ増ス可ラス
一タヒ律文ノ條款ヲ増加スルキハ民事隨テ繁雜ヲ致
スモノナリ

已ムヲ得サルノ理由アラサルヨリハ漫ニ法律ヲ更ム
可ラスジユテニヤン帝ハ妻其ノ夫ニ別ルノ後若シ二
年ヲ經テモ尚ホ其ノ夫ニ完婚ノ力ナキハ即チ妻タ

ルモノ其ノ得分ヲ失ハサルノ法律ヲ改メテ三年ヲ期
限トセリスノ如キ事情ニ於テハ期限ヲ二年ト定ムル
モ敢テ害ナク又三年ニ期ヲ延スモ故ラニ大利アルヲ
見ス變更セサルノ勝レルニ如カサルナリ

若シ制法者大度ニシテ法理ヲ説明スルニ吝ナラサル
ハ則チ其ノ苟且ニ出サル所以ヲ開示スヘシ羅馬ノ
法制ニ盲人ハ憲官ノ威儀ヲ觀得サルヲ以テ法庭ニ出
テ訴訟ニ從事ス可ラスト謂ヘリ此ノ法制ヲ説明スル
一ハ至確ノ法理甚タ多シ然ルニ此ノ愚説ヲ故ラニ用
ウルハ察スルニ他ニ寓意アルニ因ル乎

民法學士パオルハ孩兒ハ七月ニシテ成長スト主張シ
パイタゴラスノ數理ヲ援テ其ノ說ノ臆測ニアラサル
ヲ贊成セリパイタゴラスノ數理ヲ以テ斯ノ如キ案
件ヲ判斷ス奇異ノ觀ヲ作サ、ルヲ得ニヤ
我カ佛國二三ノ律學士ノ說ニ若レ國王新タニ土地ヲ
略取スルヲアレハ王冕ノ圓體ナルニ象トリテ其ノ寺
院ハ王權ニ隸屬スヘシト言ヘリ〔按〕王冠ノ圓體ナルニ
ニシテ其ノ權カ概括予ハ此ノ處ニ於テ故ラニ王權ノ
セサルナキヲ云フ乎
有無ト民法教法ノ義理ハ當サニ政法ニ一步ヲ讓ラサ
ル可ラサルヤ否ヲ論究スルヲ欲セス唯タ將ニ一言ヲ

述ヘテ斯ノ如キ至大ノ權ハ必ス至確ノ法理ヲ以テ分
疏辨明セサル可ラサルヲ説明セントス抑モ威權ヲ
標示スルノ形象ニ附會シテ以テ威權ノ實ヲ得ントス
天下寧ロ此ノ理アラシヤ

ダフキラ曰クロアニニ開キタル議院ハ孤子ノ基業ヲ
返付シ且ツ之カ處分法ニ關涉セル事件ニ至テハ法律
ノ精神ニ於テ一瞬時ヲモ算計セサルヲ得ス殊ニ榮譽
ヲ得有スルカ如キ事件ニ於テハ一年未滿ヲモ一年既
滿ト看做サ、ルヲ得サルヲ口實ト爲シテ僅カニ十四
歳ニ跨リタル甲列王第九世ヲ成丁ノ人ト議定セリ此

規則ハ古來慣行スル所ニ係リテ未タ弊害ヲ生セサ
レハ予ハ故ラニ之ヲ辨駁スルヲ好マス唯タ之ヲ説明
スルノ理義其ノ實ヲ失シテ國民ノ政府ヲ特リ榮譽ノ
ミトスルノ偽説ヲ指示スルノミ
擅斷自信ノ害ノ其ノ人ニ於ルハ適カニ法律ニ於ルヨ
リモ著大ナリトス佛國ノ法律ニ商人カ破産ノ前、十日
間ニ處行セシトテ悉皆欺詐ノ行為ト認定スルハ即チ
法律ノ自信ナリ羅馬ノ法律ニ訴訟ノ結局ヲ惧ル、カ
為メニアラス醜聲ノ外聞ヲ厭フカ為メニ非スシテ夫
タルモノ、故意ニ犯姦ノ妻ヲ容留スルトテ罰スルハ即

チ人ヲ自信スルナリ此ノ場合ニ於テ法官ハ擅ニ夫タ
ル者ノ、此ノ舉動ニ出タル本意ヲ臆斷シテ曖昧錯雜
ノ情緒ニ就テ判決ヲ下サ、ルヲ得スト雖モ法律ヲ自
信スルニ方テハ之ニ反シテ特リ定則ニ從テ判斷スル
アルノミ

既ニ論述スルカ如ク普拉多カ制定セル耻辱ヲ避クル
ノ志趣ニアラス全ク臆病ニ因テ自殺スル人ヲ罰スル
法律ノ如キハ則チ死者ヲ起スニ非サルヨリハ其ノ此
ニ到ルノ志趣ヲ知リ難キノ場合ニ方リテ特リ法官ヲ
シテ其ノ志趣ニ從テ判斷ヲ為サシムルモノナレハ無

理ノ至ト謂ハサルヲ得ス

避クルニ難ラサル法律アルカ為メニ立法ノ基礎ヲ動搖スルハ猶ホ無用ノ法律アリ之ニ依リテ必要ノモノノ作用ヲ減損スルカ如シ法律ハ各其ノ作用ナカル可ラス決シテ變則特例ヲ設テ規避ノ便ヲ與フ可ラス羅馬ノフハルシダヤン律ニテ繼嗣ハ常ニ遺業ノ四分一ヲ所有スベシト制定シ而シテ又他ノ法律ニ因テ遺囑ヲ立ル人ニ繼嗣カ四分一ヲ所有スルヲ禁止セシメタリ是レ法律ヲ玩弄スルニ非スシテ何ソヤ何トナレハ遺囑ヲ立ル人ヲシテ果シテ繼嗣ヲ愛スルノ心アラシメンカフハルシダヤン律ヲ制定セサルモ遺業ノ四分一ハ繼嗣ノ所有トナラン若シ又愛心ナカラシメハ決シテ肯シテ談法律ノ作用ニ從ハサルヘシ法律ノ言ヲ下スニハ須ラク詳審精密ヲ加ヘテ事理人情ニ乖戾セサランヲ要ス和蘭侯ノ追捕狀ニ西班牙王腓立二世ハ若シ能ク侯ヲ殺ス人アラハ本人或ハ其ノ繼嗣ニ二萬五千金ヲ與ヘ併セテ貴族ノ爵位ヲ授クヘシト誓約シ加フルニ國王ノ言上帝ノ臣僕ヲ以テ之ヲ保證セリ斯ノ如キ行為ニ貴族ノ爵位ヲ約シ斯ノ如キ行為ヲ上帝ノ臣僕タル稱號ヲ以テ保證スルハ齊

ラシメンカフハルシダヤン律ヲ制定セサルモ遺業ノ四分一ハ繼嗣ノ所有トナラン若シ又愛心ナカラシメハ決シテ肯シテ談法律ノ作用ニ從ハサルヘシ法律ノ言ヲ下スニハ須ラク詳審精密ヲ加ヘテ事理人情ニ乖戾セサランヲ要ス和蘭侯ノ追捕狀ニ西班牙王腓立二世ハ若シ能ク侯ヲ殺ス人アラハ本人或ハ其ノ繼嗣ニ二萬五千金ヲ與ヘ併セテ貴族ノ爵位ヲ授クヘシト誓約シ加フルニ國王ノ言上帝ノ臣僕ヲ以テ之ヲ保證セリ斯ノ如キ行為ニ貴族ノ爵位ヲ約シ斯ノ如キ行為ヲ上帝ノ臣僕タル稱號ヲ以テ保證スルハ齊

シク榮譽道義宗教ノ趣意ヲ顛倒スルモノナリ
想像上ノ良圖ニ托シテ原來惡業ニアラサルヲ禁止
セサルヲ得サルカ如キ情勢ハ絶テ無ク僅カニ見ル所
ニ過キス

法律ハ純正公直ナラサル可ラス原ト法律ハ人ノ非義
ヲ罰センカ為メニ制定スルモノナレハ自ラ潔白ニシ
テ一點ノ瑕疵ナキヲ要ス西峨七ノ法律ヲ觀ヨ若シ猶
太宗徒ニ豚肉ヲ食セサルモノアレハ忽チ強迫シテ一
切ノ食物ニ悉ク豚肉ヲ加ヘタリ其ノ法律タル徒ニ壓
制以テ自己ノ教規ニ背馳スル所ノ法律ニ從ハシメ自

餘ノ人民ニ齒列セサル標目ヲ立ルノ外更ニ應效ナシ
誰レカ其ノ慘刺ヲ咎メサランヤ

第十七回 法律頒定ノ拙策

羅馬諸帝ハ制誥命令ヲ以テ其ノ志趣ヲ明示セシ一全
ク我カ諸王ト全様ナリ唯ク諸帝ハ法官及ヒ私氏ニ書
ヲ呈シテ法律ノ疑義ヲ質問スル一ヲ許容シ諸帝ノ答
書ヲ批答ト稱スルヲ異ナリトスルノミ原トレスクリ
フトトハ教主ノ指令ヲ稱スルニ適當ニシテ甚ク法制
上ニ弊害ヲ生スルヲ明白ナリ何トナレハ法理ノ質義
ハ適以テ制法者ノ方向ヲ迷惑スルニ足リテ事實ノ明

速スル一常ニ確當ナラサレハナリジューリユス、カピ
トリニユスノ言ニ據ルハトラレヤン帝ハ一時ノ裁決
殊ニ變例特旨ヲ擴充シテ一般ニ自餘ノ事件ニ及ボサ
シ一ヲ患ヘテ往々批答ヲ與フ一ヲ辭絶シマクリヌス
ハ一切批答ヲ廢止スルニ決シ且ゴモトユスカラカル
ラ等諸暗君ノ答詞ヲ法律ト認ムル一ヲ肯セス持リジ
ユスナニヤン帝ノミ思想ヲ殊ニシテ其ノ纂輯セル法
典ハ批答ヲ以テ充滿スルヲ見ルヘジ
予ハ羅馬ノ法律ヲ講スル人ニ忠告シテ審カニ斯ノ臆
斷假説ノ類ト元老院ノ議定書、民會ノ議定書、諸帝ノ憲

法乃至事理ノ自然ニ基キタル法律、婦人ノ弱質、未成丁
ノ無力ヲ體認シタル法律、公衆ノ利益ニ關涉スル法律
トヲ辨別セン一ヲ希望ス

第十八回 畫一法ノ意見

法制ノ畫一ナルヲ欲スルハ往々大人豪傑甲列曼帝モ此ノ失アリ
ノ意中ニ浮動スルヲ免カレスト雖モ狹量短識ノ人ニ
至テハ皆ナ此ノ思想ヲ懷カサルハ无シ是レ畫一法ハ
物貨ノ貿易ニ全一ノ度量ヲ用キ、一國全一ノ法律一從
ヒ、諸人全一ノ宗教ヲ奉シテ一視全仁ノ美觀ヲ現スレ
ハナリ然ラハ則チ之ヲ以テ理ノ當然ト為シ權變ノ術

ヲ要セスト為スカ將ク朝令暮革ノ弊ハ舊物ニ因循ス
ルノ患ニ比シテ却テ小ナリトスルカ夫レ離群ノ大才
トハ畫一法ヲ必行スヘキ形勢ト異同ヲ並用スヘキ事
情トヲ識別スルノ謂ニ非スヤ東洋ノ支那帝國ヲ一見
セヨ漢唐ノ禮樂ヲ以テ本土ノ民ヲ治ノ韃靼ノ法律ヲ
用キテ滿人ヲ約束シテ海内無比ノ泰平ヲ謳歌セリ果
シテ若シ人民能ク法律ヲ守リテ違フヲ無レハ何ソ其
ノ異全ニ察ヤスルノ暇アラランヤ

第十九回 制法者ヲ列論ス

亞力斯度立ハ動モスレハ普拉多ヲ嫉ミ歷山大ヲ慕フ

テ議論偏頗ニ失シ普拉多ハ雅典人ノ暴虐ヲ憤ホリマ
キヤウエルハフハレンタノイ侯ヲ尊信シテ口ニ侯ノ
事ヲ絶ヘサスソルトーマスモールハ其ノ思想ヲ吐ク
トナク唯ク其ノ所讀ノモノヲ記述シテ希臘ノ古制ヲ
今日ニ復シテ諸國ノ治平ヲ謀ラント欲ス政論家ハ皆
ナ英國ノ王室傾覆以來ノトヲ見テ亂世逆境ノ名ヲ下
シテ異辭ナキニ獨リハルリントンノミ其ノ共和政ヲ
嘆美シテ止マス之ヲ要スルニ法律ハ常ニ制法者ノ愛
欲嗜癖ニ投セサルハナキヲ以テ其ノ制ヲ立テ法ヲ設
クルニ方テ或ハ一時制法者ノ頭腦ヲ經過スル際ニ其

ノ愛欲嗜癖ノ氣味ニ深マルニ過キサレ氏時トシテハ
長ク腦中ニ滯止シテ全ク之ニ融會シテ純然タル愛欲
痴癖ト爲リテ發作スルアリ

萬法精理卷之二十九 終

明治八年十一月廿八日版權免許

繙譯並出版人 何 禮之

東京富士見町四丁目十一番地

馬喰町二丁目

島村利助

芝太神宮前三島町

山中市兵衛

日本橋通三丁目

丸家善七

南傳馬町二丁目

穴山篤太郎

發兌
書林